

504  
66

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





504  
66

人明しをて見たる  
候徒ハシロ

504  
66



504-66



人間として見たる使徒パウロ

賀川豊彦著



11. 8. 4

内交



## 序

パウロよ、おゝ、パウロよ！

おまへの行く道を 見守つて 私は 今も感激の涙にくれる。

美と調和に溶けたギリシャ文化が 漸く末期に近づいた時に 地中海の周囲は ゆかりも無く 肉の香りに陶酔せんと努力した。

その時 美の爲めにとて 奴隷を椅子にくくりつけ、踵から その生皮を剝いた。それが 文化的羅馬の自由であつた！

その時に おまへは 狂人のように地中海の隅から隅へ吠えたぐる狂犬として たゞひとり大工イエスの宗教と 良心の目醒めの春を告げて廻つた。

そらだ、その爲めに 世界は 今日の違つた世界になつた。

それは あまりに 冒険に見えた。盗賊の難、異邦人の難、市中の難、荒野



の難、海上の難、僞兄弟の難——それらはまだ 驚くに足らぬものであつた。勞し、苦しみ、屢々眠らず、飢え渴き 屢々斷食し 凍え 裸にせられ、屢々獄に入れられ、鞭うたれ、死に瀕むこと屢次、——この不撓の丈夫が 五度ユダヤ人に 三十九の鞭を受け、笞に打たるゝこと 三度、絶息するまで石にて打たれ、市の外に引き出され友人の泣き悲しむ 死別の涙の中鳳凰フェニックスの如く甦り、百倍の勇氣もて 十字架の道を説き 安居の道を知ることなくして 不動の救を指示し、三度び破船に遭ひて暴風に逆さむき、一晝夜、海に漂流して 尚ヨナの如く 海に愛憎つかされ、天地を貫くその至誠に 死者を甦らす奇蹟を持たされ 明星の如く 新しき世紀の曙を啓示してくれた——汝、パウロは 男子でなくしてなんであらう。

「誰か弱りて 我弱らざらん 誰か躓きて我躓かざらんや」 丈夫よく自己の弱點を知る。「罪人の首」として自覺した魂は 善いこと 悪いこと、徳になる

こと 徳にならぬこと 凡てを曝らけ出して 民衆の前に自己の批判を乞ふ——汝、パウロよ 汝は男子でなくてなんであらう。

醒めて 萬民に 神を説き 夢みては第三の天に 天使と物語る。汝、パウロは秘義を知つてゐる。

ダマスコ門外 光に打たれ 盲かきとして 自らを發見した汝は 更改の力をたゞイエスにのみ發見した。世界の更改は 自分から始まる。おゝパウロよ、汝は遂に 自己の更改によつて 世界更改の道を發見した。おまへは嘗て コリント人にかう書いた。

兄弟よ

召を蒙れる 汝等を觀よ

肉によれる智慧あるもの多からず

能あるもの多からず

貴きもの 多からざるなり



神は智者を愧しめんとて

世の愚なる者を選び

強者を愧しめんとて

世の弱者を選ぶ、

神は有るものを滅さんとして

世の賤者、藐視するもの

即ち無きが如きものを選び給へり

愚衆の愚衆、俗人の中の俗人——その中に猶捨てられた人間の屑を神が拾ひ集める。その馬鹿さ加減を おまへはよく知つて居る。

然し 神の馬鹿は 人間の智者よりも賢く、人間を鑄換へるには力が餘つて居る。

罵らるゝ時は

祝し

窘らるゝ時は

忍び

誇らるゝ時は

勸をなす

我は 宇宙の観玩にして

世の汚穢

また 垢の如し

何人も顧みてくれ無い中に 真理の把持者、無傷害愛の實行者として 塵箱の英雄、見せ物の大立物として おまへは彷徨する。

誰れも賞めてもくれ無いのに おまへは労働しながら 福音の宣傳に専念し神の如き熱心を以つて 神と共働し、イエスの苦痛に參與して おまへは自らを奴隷だと云ふて喜ぶ。

血が こみあげてくる！ 永遠に若いおまへの血が！

おまへの血は 私の血だ！ おまへは死んだ。そして私等は甦らされた！



誠に おまへの途は尊い道であつた。最も人間らしい人間パウロよ！ 私は  
おまへの爲めに 六千度の太陽よりも 強い熱を受ける。

おまへは熱だ！ おまへは血だ！おまへ自身に光と眞理でなくとも 傳達せ  
らるべき熱であり 血であることは確かだ。

私の血はこみあげてくる！ おまへの胸の中に湧いた贖罪の血は また今日  
我等の胸の中に 湧く。

あゝ 沸騰する血！

あゝイエスの爲めに沸騰する血は 永遠に 私を若返らせてくれる！

パウロよ、汝、沸騰する靈よ！ 人間よ！

一九二二年六月二十日

賀 川 豊 彦

神戸貧民窟にて

## 例 言

■この書もまた伏見教會牧師の吉田源治郎氏が 私の爲めに 筆記して下さつた  
ものであります。私はそれを心より感謝して居ります。

■この書の第四章は多少六ヶ敷いところがあると思ひますが、信仰的に讀みたい  
と考へられる方は 之を省略せられても少しも差支へはありませぬ。

■聖句は改譯を用ゐて居りませんから その積りで讀んで頂きたいと思ひます。  
何分にも引照が多いので、確實を期しましたが 誤謬が無いとも限りませぬか  
ら、引照の眞違つた處があれば御訂正の程を願ひます。

■この書は比較的纏まつて居るように思つて 嬉しく思つて居ります。あまり専  
門的になると一般讀者には六ヶ敷いし、あまり平易では人間としてのパウロを  
よく現すことが出來ないので、恰度これ位で頃合ひだと思つて居ります。然し



吉田源治郎氏の好意が無ければ到底世に出られ無いものであつたと思ふと有難  
いことだと思はれます。

# 目次

## 序論

序 節 イエスを愛する群と憎む群……………一  
キリストが墓から出て後(一)——男性的改心の模表(三)——告白文學の先驅(六)

## 第一章 人間的な餘りに人間的なパウロ

第一節 『男』として……………一三  
生理的研究(一三)——彼の教育(二三)——恥と誇(二六)——傳習的分子(二九)

第二節 新らしき人として……………三〇  
醒めたる人(三〇)——舊き人と新らしき人(三一)——第一のアダムと第二のアダム(三一)——  
新らしき衣(三二)——傳習の破壊(三三)——自由の靈(三三)

第三節 超人として……………三五



王者として(三五)——萬有の所有者として(三五)——第一人者として(三七)——天使の審判者(三九)

第四節 強人主義……………三九

強人パウロ(三九)——全能なるクリスチャン(四〇)——真勇主義(四一)

第五節 奴隸道德の誇……………四二

大愚主義(四二)——労働主義(四三)

第六節 闘人として……………四六

勇猛な闘人(四六)——征服者として(四八)——勝利者として(四八)

第七節 哲人生活……………四九

哲人として(四九)

## 第二章 人間線を越えて

第一節 祈禱の生活……………五三

祈禱の人として(五三)——成長としての祈(五五)——デガゲン時代と祈(五八)——彼の祈の特質(六三)

第二節 絶えざる黙示……………七一

瞑想と黙示(七一)——危機に於ける黙示(七二)——彼の傳道旅行(七六)——パウロ傳年表——(八七)

第三節 宣傳者……………八九

宣傳の意義(八九)——教人を得んため(九二)

第四節 神人の域……………九六

奇跡と自信(九六)——天界地界との靈通(九六)——神の子顯現の希待(九七)——新らしき創造(九七)

第五節 死線を越えて……………九八

死に面して(九八)——死の覺悟(一〇一)——最も美はしき死の超越者(一〇一)

## 第三章 内觀のパウロ

第一節 衷なる人の研究……………一〇三



自我の穿鑿(一〇三)

四

第二節 良心の圓周……………

一〇五

良心第一(一〇五)——自ら欺かず(一一一)——罪の分類(一一四)——喜の系譜(一一六)

第三節 彼の感情の解剖……………

一一〇

彼の涙と愛(一一〇)——彼の苦痛と喜(一一二)——彼の怒(一二九)——彼の熱心の研究(一三一)——彼の至誠・煩悶・賞讃(一三三)

第四節 愛に就いての彼の徹底……………

一三六

愛の人パウロ(一三六)——愛國(一三九)——愛の神と愛の報酬(一三九)——博愛(一四〇)——愛の本質(一四一)

第五節 詩人としての彼……………

一四四

優秀なる宗教的散文詩(一四四)——彼の譬喩の研究(一四八)

第四章 論理・非論理・超論理

第一節 パウロの論理の方式……………

一五一

欲求の論理(一五一)——超論理の世界(一五五)

第二節 彼の哲學的教養……………

一五六

文化都市タルソ(一五六)——苦悶せるアテンス(一六三)——哲學系統の地理的移行(一六一)

第三節 彼の思想の系統……………

一六九

五種の解釋(一六九)——ユダヤ主義と終末思想(一七一)——彼のギリシャ思想(一七九)

第四節 ミステリーの研究……………

一八四

彼の異邦思想(一八四)——密儀流行の理由(一八九)

第五節 彼の思想の變化……………

一九二

逆理と並行論理の妙用(一九二)——神歎とキリスト觀(一九六)——彼の歴史哲學(二〇二)——思想の變化(二〇五)

第五章 信仰の聖域

第一節 信仰の定義……………

二〇九

再生の信仰(二〇九)——自我の深穿(二一一)



第二節 信仰の本質……………二一七  
 解脱の三種(二一七)——信仰に由る義(二一九)——輪廻生活の破碎(二二二)  
 第三節 信仰と道德の争……………二二七  
 善の完成と苦悶(二二七)——神の力の吸収(二三一)  
 第四節 信仰の熟達と進歩……………二三四  
 信仰は愛より小(二三四)——信仰と告白(二三七)——信仰の熟達と進歩(二三九)  
 第五節 救の進行……………二四一  
 救の四段階(二四一)——贖罪思想の解剖(二四六)——贖罪の助手(二五二)

序 論



## 序節 愛する群と憎む群

パウロの自叙傳の一節(ガラテヤ書十章十一以下) 参照

キリスト  
が墓か  
ら出て後

イエス・キリストの復活後、ユダヤ人の間に二つの系統が、——  
或は二つの群と云つていゝ——出來た。それはイエスを愛する群と  
憎む群とであつた。

前者に屬いた人は、子供、女、罪ある人、貧乏人の階級であり、後者に左袒した  
人人は、パリサイ宗の人人と、その手先に使はれたゴロツキと、教育ある階級の人  
々であつた。然し、此貧しき人、罪ある人、女、子供たちの信じた宗教に實に美は  
しい香の高いものがあつたので、「憎む群」に屬きながらも、いつしか「愛する群」  
へ心を傾倒する者が生じて來て、遂には少なからぬ離反者を出したのであつた。此



傾向は、既にヨハネ傳にも表ははれてゐて、其處には、パリサイの仲間からの裏切者の數例が興味深く記されてゐる。(ヨハネ傳三章一。二十五。四章一、十九章三十八以下)

殊に當時の上流社會から、かゝる裏切者が頻出した事は著しい事柄であつた。

私は、屢々ロマ書を倒叙的に——十六章から始めて逆に——讀んでみる。そして、第十六章に記載された二十數名の人格を研究すると、基督教がいつの間にか、漸次當時の上流階級の間に着しく宣傳せられて、パリサイの人たちの間から、貴顯の間から數多き人々が、イエスを憎む群に裏切つて、愛する群へと移行して行つた模様がまざく／＼と想像されるのである。

パウロもまた其一人であつた。彼はパリサイ宗からの裏切者の第一人者である。元來パウロは、パリサイ宗のパリサイ宗であつて、非常に偏頗な國粹論者であつたのみならず、『イエスを愛する群』に對しては實に猛惡な態度を持つてゐた一人であつたのである。それが、突變的に、イエスの弟子の一人に急變したのである。此豹

變の原因は何であつたか?

男 性 的  
改 心 の  
模 表

で、私どもの知りたいことは、パウロの性格と曲折ある彼の簡性の發展と、イエスと世界とに對する彼の貢獻とである。

今日に於ても、我々の社會の裡に二つの大きな集團がある——キリストに屬く者と、キリストに屬かざる者との二つの大きな流れである。

そして或時に、キリストに屬く團體の者が、美しい行動を表はす時に  
*Anti-Christ.*  
アンチ・キリストの仲間から、續々と裏切者が出るのである。そして此人々の中に、屢々パウロのやうな教育のある優秀な人物のあることを私は信ずるのである。

時代の變り行くうちに、パウロの如き人が、我々の間にも、必ず出る事を私は疑はぬ者である。或人はパウロは基督教を毒する者だといふのである。例へばニイチエの如きは其一人であつて、『イエスは單純であるが、パウロは基督教を毒した男であつて、彼は、自分の考で基督教を全部書換へたのである』といつて悪評をするの



である。ニイチエのみならず、最近の批評家の中には、同じやうな考を有つ人もある。彼等はしきつてパウロを悪評するのである。

然しながら、私は、パウロの男性的な態度を推賞して憚らないものである。パウロが生れながら、自らに屬してゐた特典の一切と、世人の嘲罵とを無視して、人間らしく、男らしく、イエスを憎む者から激變して、イエスの熱愛者となつた其男らしい態度、それから湧いて出る彼の宗教的態度の香ばしさを飽迄も——特に今日の時代に——推賞する者である。

男性的クリスチャン、パウロ！ 實に、彼は、アンチ・キリストの思潮から急變してイエスに屬かうとするすべての人の模表である。私はこれをパウロに於て見出すのである。

十九世紀末のフランスは、デカタン文學の流行時代であつた。そして多くの詩人が世紀末の苦惱に囚はれたのである。が、私どもの心を惹く一つの事は、其人々の

中の或者——ボードレエル、マラルメ、ベルレインの如き人々——が、其始めは、放蕩を讚美し、姦淫を頌へ、罪惡と肉慾とを高唱したものが、中ばにして、其猛烈な態度に激變を來して、遂に彼等は急變してイエスに行つてゐる——ロマ加特力ではあるが。——確に世紀末からして、イエスに行く一つの憬憧が、此らの傷ましき新人の魂の上にあつたことを私どもは見るのである。

そして、それらの人々の或者は、男らしく、スツバリとイエスに屬したのであつた。我々の心の中にも二つの傾向がある——イエスを憎む群に行くか、又はパウロの如く、目覺ましく、鮮やかにイエスの側に立つ男らしい態度を経験するかといふ……。

はつきりとイエスに屬するか？ 或は、引つ張られる犬のやうに厭々ながらイエスに屬するか？

パウロはイエスに敗けた。然しナポレオンのやうに死ぬ前になつて、イエスに敗



けたのではない。彼は男らしく、其壯年時代にイエスに降参したのであつた。これが、特に、私がパウロの研究に喜を持つ第一の理由である。

パウロは自叙傳を書いた。元來、傳記文學は極めて近世になつて出来たものである。

告白文
先
學
の
驛

日本の國には、殆んど——純粹な意味に於ての——傳記文學らしいものは一つもないのである。世界に有名な告白文學が三冊ある。即ちそれは、1 神への祈の調子で書かれたアウガスチンの「懺悔録」と、2 近世自然主義文學の基となつたジャン・ジャック・ルソーのそれと、3 トルストイの「我懺悔」とである。

人間の個性が餘程、圓熟して來ないと自分を曝け出して、眞實な自己を元のまゝを告白する事はなしえないものである。日本では、國木田獨歩が「自ら欺かざるの記」を書いて後、漸くにして、我々の間にも自叙傳文學——告白文學が表はれるやうになつたのである。それまでのものは、到底充分に自己を評價し得なかつたものである。

である。

キリスト前後に、自分の傳記を、自分で忠實に書いた者を……パウロの外に……私は知らぬ。たとへ、パウロが、ロマをよう征服しえなかつたとしても、自己の缺點、長所を人の前に、明らかに、眞實に告白し得たのは實に、偉い人間である。自分の心を、かく迄見事に征服しえたといふのは、彼が偉人物である一證とするに足りる。一體自分で、自分を批判し、殊に、人の前に、凡てをさらけ出して、明らかに公然と書ける人間は、餘程、偉い人間である。

ニイチエは Ecce Homo (此人を見よ) を書いて、自分の長所を自分で讚美してゐる。——其中にパウロの惡口を云つてゐるのである——處が、パウロは、此ニイチエの一千九百年前に、既に、充分に自分を讚美し、明らかに自らを批判する力を持つてゐたのである。以て、彼が如何に、心理的に成熟した個性であつたかが分るのである。



孔子ですら——釋迦は勿論のこと——自叙傳を書いてゐない。我々は、日記ですら、相當に割引を施して書くのである。況して、自分の凡ての弱點をも眞實に人の前に告白し、それと同時に、自己の美點を確認して、自分はえらいと書ける人間は、稀である。ストイツクの群の中にも——マアカス・アウレリアス、セネカ等の——かゝる文學は遺されてゐないのである。であるからして基督教文學中——以上の見地からして尤もすぐれたものは、使徒パウロの書いた十三通の手紙である。

固定した堅苦しい『教理』としてパウロの手紙を読む人は讀むがいゝ。多の人はくさういふ風に教へられてゐる。それは間違である。

私は、それを、自分の心が張り裂けて、たまらない心で、キリストを指して移行していつた一人の人間の偽らざる手記として讀む。今迄の生涯の全部を懺悔して、そこから出て來る成熟した個性の心の消息が、實に、明らさまに、其うちに浮み出てゐることをみるのである。

それで、イエス・キリストを論ずることと、パウロを論ずるのとは、そここ大變な相違がある。私はイエスの心理的事實についての引照する爲め聖書に縦横に交錯して印を付けて居るが、パウロを研究するのは、其點では、頗る無雜作である。少しも心配がない。彼は自分で、たゞの人間だと告白してゐるし、自分の缺點を自分で紹介し、又此點は自分がすぐれてゐると云つて、平氣で自らを人に推薦してゐる。私はこれ程、辛辣に自己批評の出來る人間を知らないのである。以上が、特にパウロの研究に興味をもつ其第二の理由である。

精神病院で、精神病患者が正氣に回復したか否かを試験するのに、一つの試験を施す。それは、其人間が果して、自分で自分を意識してゐるかどうかを調査するのである。其方法は、極めて僅かな間隔をもたせて一本の針を皮膚に突き立てゝみる。正常な意識であれば、一點を刺いたか二點を刺いたかがはつきり分明する。健全な意



識の所有者は、自分の状態を明らかに知つてゐる。狂暴である間はそれが分らない。所が——今日の多くの人は、自分が如何に神から外れてゐるかを氣付かないで平氣であるのである。これは一種の發狂状態である。自分で自分の神から離れてゐることを意識し出した時にこそ、始めて自己が回復されるのである。

パウロの手紙は、實に古今を絶した優秀な懺悔録——アウガスチン、ルソー以上の告白文學である。それは、殆んど神それ自身が誌されたかと思ふ程、そこには鋭い自己批判が示されてゐる。神がパウロを捕へた時、——パウロの性格の中に神のインスピレーションが示された時にパウロは自らを告白せざるを得なかつたのである。神がパウロに指をつけた時に、彼は、居たまらずして正直に罪を告白したのであつた。

彼は當時の論文書きの形式に倣つて手紙を書いてゐる。バルキットに依るとパウロは『手紙の形』で論文を書いたのである。その論文の中に、彼は自己を批判し、

自己の全部を懺悔してゐるのである。それで、我々は、パウロの胸の中にはいり、何らの秘密なくしてパウロに觸れることが出来るのである。

此處に、彼の男らしい所がある。ガラテヤ書は、彼の自叙傳である。彼は其中に、自分を讚美し、自分を批難してゐる。

わが曩にユダヤに在りしとき行ひたる事を汝等聞けり。即ち甚しく神の教會を窘め、かつ之を殘賊せり……、我また心を人よりも先祖等の遺傳に熱くしユダヤ教に在りては、我が國人のうちの年等しき多くの人に超りたり（ガラテヤ書一章十三、十四）

即ち、此處に、缺點の自白もあれば、……青年として自分は優等であつたと云ふやうな……自慢も記されてゐる。そして、彼は、コリント前書（九章十五、十六）では、『誇ることを止めたら死ぬ方がいゝ』とまで云つてゐる。

かゝるパウロの回心の消息は、實に痛烈なものであつた。それは實に血の滲むや



うな悲痛ひつらうなものである。彼は果して、如何いかなる人間であつたらうか？

# 第一章

人間的な餘りに  
人間的なパウロ



- 第一節 『男』として
- 第二節 新らしき人として
- 第三節 超人として
- 第四節 強人主義
- 第五節 奴隸道德の誇
- 第六節 闘人として
- 第七節 哲人生活
- 第一節 『男』として

生 理 的 研 究

誰か弱りて我弱らざらんや(コリント後書十一・二九)

パウロはどんな人間であつたか？ 私はパウロの心理を解剖する前に彼の生理的研究を試みるであらう。ガラテヤ書第一章に、彼は自らの青年時代の消息を述べてゐる。

青年期 ガラテヤ書一章十三—十六 わが曩にユダヤ教に在りし時行ひたる事なんぢ等聞けり、即ち甚しく神の教會を窘め、かつ之を殘賊せり、我また心を人よりも先祖等の遺傳に熱くし、ユダヤ教に在りては我が國人のうち年ひとしき多くの人に超りたり。然れども我が母の胎を出でし時より我を簡びおき恩をもて我を召し給ひし神、その子を異邦人の中に宜べしめんがため、心を善として彼を我心に示し給へる其時、われ直ちに血肉を謀ることをせち……

母の胎を出た時から、自分は、神に簡ばれてゐて、神が私を召した時には、親類、縁者の誰にも相談せず、キリストに隨いて行つたのであると、パウロは告白をし



てゐる。

壯年期　ロマ書十五章十七

是故に我れ神の事に就いてはイエスキリストに由りて誇る所あり

ロマ書を、逆倒的に讀んで行くとパウロの性質がよくわかる。「神の事については自慢する事が一つある」とパウロは此處に云つてゐる。

ニイチエは、パウロに對して猛烈な批評を下して「パウロは奴隸生活を教へ、彼自身も脱け殻の如き人間である」と云ふのであるが、然し、それは、パウロを本當に知らぬ者の言である。

パウロは、自己を主張する法を知つてゐた。パウロは何を誇つたのであつたか。

「いかにとなれば、キリスト我を助けて、異邦人を順従しめん爲に休徵と奇跡の能と神の靈の能を顯し、言と行とを以てエルサレムより、あまねくイルリコに至るまで其福音を傳へさせ給ひしことの他は一つの言をも我敢て曰はざるなり」(ロマ書十五章十八、十九)

キリストが私を助けて異邦人を征服する爲に、休徵と奇跡と、言葉と行とを以て

エルサレムからイルリコにまで福音を傳へた——此一つの事の外は敢て語らない。そして此事を自慢するのだと彼は誇りげに云つてゐる。

或人は、イエスの奇跡を疑ふのである。けれども、それはパウロ傳を讀んで後、キリストの生涯を見るならばよく了解される事柄であつて、イエスのみでなくパウロ自身にも奇跡が出来たのである。其當時は奇跡の時代であつた。ウヰリアム・ラムゼイに由ると、其當時「パウロや、イエスよりもよく奇跡の出来る人間があつた」何でも、アポロニアスと云ふ男は、タイバー川の岸から、天へ昇る試験をしたとのことである。尤も其男は墜落して死んだが。

兎に角、民衆も——群衆心理が——奇跡を期待してゐたので、其要求に應じて、奇跡が行はれ得たのであつた。それでパウロは自分の手に此奇跡が行へた事を此處に述べて、其事を誇り、これで男として人生の生き甲斐があると云つてゐるのである。



パウロは又、其壯年時代に猛烈な宗教運動をやつた。

我は凡ての使徒よりも多く勞めたり。此は我に非ず、我と偕にある神の恩恵なり。(コリント前書十五章十) 外の使徒連が、エルサレムにジイツとしてゐる時、パウロは猛烈に働いたのである。元來、宗教運動は、猛烈な運動である。宗教は、本當の運動である。少く共、パウロの宗教は猛烈な運動であつた。ザザキエー、ウエスレー、リウキングストンの一生を考へても、私は宗教が、文字通りの運動であることを考へるのである。

彼の老年期 ビレモン書九―十

愛の故に囚りて寧ろ汝に求む、我すでに年老い、いまキリスト・イエスの爲に兇人となれるパウロ、此の如き狀にて、わが縲綫の中にて生みし子なるオネシモの事を汝に求む。

私は、いつもパウロの老年期を考へる時、その如何にも光榮に充ちてゐる狀を想見して、彼の偉大を思ふのである。

パウロは、キリストのために牢獄に投ぜられたが、自ら老齡である事をも忘れて奴隸オネシモの爲に煩悶してゐるのである。更にテモテ後書四章(六―七)を見れば此獅子兒の風采が窺はれる。これは有名な句である。

われ今、供物とならんとす、我が世を去る期ちかづけり、われ既に善戦を戦ひ、既に馳るべき途程を盡し、既に信仰の道を守れり。

『自分は一生懸命走るだけ走つた、そして、自分の世を去る時が近づいた』と云ふ此言葉の背後に、彼の大なる誇と光榮が潜んでゐる。

彼の不眠と不休 パウロは屢々眠らなかつた。彼は又身體が弱かつたので、人一倍疲勞した。パウロは自慢することを知つてゐたと、共に缺點は缺點として、ハツキリ云つてゐる。此點は人より劣つてゐると、ハツキリ告白して、決して欺瞞しない。こゝが彼の偉い點である。即ち『彼らにまさりて疲れ』と有りの儘に自分の弱い所をさらけ出してゐる。(コリント後書十一章二十七)



彼は病氣を持つてゐた。

彼の疾病

眼病（ガラテヤ書四章十五、六章十一）

汝ら其時の幸福は如何ありし乎われ汝等に證す、若し受くべくは、汝等自らの目を抉りて我に與へんとまで願ひたし。

汝等わが手づから汝等に書き遣る文字の如何に大なるかを見よ。

固疾（コリント後書十二章七）

また賜りしあまたの默示に因りて我が傲ぶる事なからん爲に一つの刺を我が肉體に與ふ、即ち我が傲ぶることなからん爲に我を撃つサタンの使者なり。

「自らの目を抉つて」パウロに與へやうとしたといふ言葉から考へて、パウロが眼病に罹つてゐた事が推定される。それから又、「わが手づから汝等に書き遣る文字の如何に大なるかを見よ！」と云ふ句からして、一層此事が確められる。

パウロは、自分の手紙を、極めて僅しか、自分で書いてゐない。それは純粹なギ

リシヤ語が出来なかつた爲でもあつたが、いつも、ルカ、テモテ、テトス（ギリシヤ人との合の子である）などを其秘書官として連れ歩いてゐた。そして、大抵は、本文は皆それらの秘書に書かして、自分はそれに署名をするか、短かい祝福を加へるのが常であつた。丁度それは、救世軍の山室軍平先生の手紙が、いつも秘書役に依つて認められて、山室先生は單にそれに署名せられるに過ぎないのと似てゐる。これは忙しい人がよくやる事である。パウロはガラテヤ書の末尾へ自分で書き加へたが、眼が悪いので小さい文字が書けなかつたのである。それで「文字の如何に大なるかを見よ」と記したのであらう。

彼にはまだ其外に病氣があつたと云ふ人がある。即ち、マラリヤに罹つてゐたと云ふ説と、癩癩であつたと云ふ説とがある。

ウキリアム・ラムゼー博士（アベルゲーン大學人道講座の教授、ギリシヤ文學の）の研究によると、パウロが旅行をした當時、小アジアは十三州に分れてゐた。パウロは最初、



ピシデヤのアンテオケへ行へ前、海岸地方に暫く居たが、其處は——今日でも、さうであるが——蚊が多くて非衛生地であつたので、後間もなく山地の南ガラテヤ地方へ逃げたのできる。で、パウロは海岸地方にゐる頃マラリヤに罹つたものと見えるのである。

又、パウロが癲癩であると云ふ説に因れば、パウロが、ダマスコ門外で突然、落馬して、茫然自失した時、黙示を受けたと云ふのは、或特別な心の状態を示すものであつて、シユワイチェルの如きは之を以つてパウロは精神病的であつたと主張してゐる位である。

イエスは少しもさう云ふ(精神病理學上から云つても)徴候がなくして、正常な心意の所有者であつたが、パウロには多少そんな所があつた。癲癩病の人には昔から偉い人があつた。ジュリアス・シーザーも、ナポレオンも、アレキサンダー、ペートウベンも皆癲癩であつた。パウロも其一人であつたかも知れない。

パウロが病身であつた事は、自分で告白してゐる。即ち、『多くの黙示に依つた自分が傲ることのないやうに、肉體に一つの棘が與へられた』と云つてゐるのは其事を指すものである。

彼の家系及び其遺傳　パウロは、イエスを憎む者の群と、愛する者の群との間に挟まれて煩悶した。そして、イエスに屬く者を迫害しやうとした時に、圖らずも其中に、既にイエスに隨つてゐる自分の親族のある事を發見したのであつた。ロマ書第十六章を、逆に讀んで行くと此事が知られる。

#### 家系と遺傳

また我と共に凶人となりし我親戚なるアンデロニコとジュニアに安きを問へ、彼使徒教家の中に名聲ある者なり、我に先だちてキリストに在りし者なり。

我が親戚なるヘロデオナに安きを問へ。

我が親戚ルキ、ヤソン、ソシバテロより汝等に安きを問へり(ロマ書十六章七、十一、二十二)

パウロの親族の改心は、パウロ自身の回心に何らかの關係があつたらうと思はれ



る。

パウロは、又、エルサレムで暗殺の危難が身に迫つた時、姉の子に助けられてゐる。

アンデロニコ及び、ジュニヤはパウロがイエスの弟子とならない遙か以前に既にキリストに在つたのである。パウロはイエスの弟子の一團を迫害しやうとした時、パウロは、自らの一族をも迫害しなければならぬ事を見出したのであつた。ユダヤ人は日本人以上に、血族關係を重視する民族である。彼の煩悶は察することが出来る。

パウロの姉妹の子此謀を聞き即ち往き陣營に入りパウロに告ぐ(使徒二十三章十六)

パウロは親戚の者に愛せられてゐた。又、其親類の人々は社會的にも相當な地位を占めてゐた人々であつたらしい。使徒達の間にも名聲のあつた事からみても、彼等は智識階級に屬した人々であつたと考へられる。パウロは名家の家庭に生れ、斯の如き善い親戚を持つてゐた。

彼の教育

パウロは當時の大學教育を受けた。其頃エルサレムに進歩派を代表するヒルレル學派と、保守的なシヤンマイ學派とがあつた。パウロは此進歩派の大學に在學して、尤も優れた天才であつたらしい。

我はユダヤ人にてキリキヤのタルソに生れ、而して此町(エルサレム)のガマエルの足下に育てられ、先祖の嚴なる律法に因りて教へられ、神に熱心なりし事は今日の汝等のすべての者の如くなりき(使徒十二章三)

ガマリエルは、ヒルレルの孫に當つてゐる。タルムツドを見ても評判のいゝ學者であつて、天才的な系統を繼いだ學者であつた。パウロは此人の門下にあつてパリサイの善分子の教育を受けたのである。

パリサイの善分子

もし證をなさんとせば彼等はもとより我が曩に我等の教の中にて最も嚴しき所に違ひたるパリサイ人なりし事を知れり(使徒二十六章五)

パウロが如此訴へける時ペストス大聲に曰ひけるは、パウロよ、汝は狂氣せり、博學汝をして狂氣せし



彼はパリサイもパリサイ、尤も厳格なパリサイの教育を受けた、猛烈なパリサイであつた。従つて、天才的で、博學者であつたらしい。それは、ローマ人の知事ペストスが「博學汝をして狂氣せしめたり」と云つた程であつた。以て、彼の學識の博さが推せらるゝ。

パウロはギリシヤ的の教養と學問に通じてゐた。彼の使用した言葉を見ればこれが分る。それは皆ギリシヤ哲學の言葉である。パウロがアラタスやニビメニデスまたメナデルなどを知つて居たことは誰れも否定しないことである。或人は彼の雄辯をデモステスに比し、その哲理をプラトンの對話篇の或ものに比する位である。

(A. T. Robertson: A Grouner of the Greek new testament, P. 1198—9参照)

パウロはギリシヤ語譯(七十人譯)で、舊約聖書を讀んでゐる。

又、彼は生れながらの羅馬人であつた。パウロの生地、キリキヤのタルソは、嘗つて、ジュリアス・シーザーが此處で交戦した時、ユダヤ人の或人々が援助した爲にシーザーは御禮として、此町のユダヤ市民に羅馬の自由市民權を與へた。それでパウロは生れ乍らに、此特權を有つてゐたのである。當時、羅馬市民權を有つことは少なからぬ特典がそれに隨伴した。それで多くの人が争うて之を得やうとした。そして、五萬圓十萬圓の資財を投じて或人は、漸くの事に之を獲得するといふ有様であつた。(日本の男爵は四百萬圓を要するが……)

かゝる市民權を有つてゐた事はパウロにとつての一方ならぬ特典であつた。それで、彼は屢々これを利用した。パウロには第三回傳道旅行を了へて歸つた時、エルサレムで囚はれた。そして其捕囚から解放される事は難作もない事であつた。それにも拘はらず、パウロは、無理やりに羅馬へ行つた。「カイザルに上告する」とさへ主張しなければ赦される筈であつたものを。



市民権を有つ者はカイザルの前に出る事が出来た。それでパウロは、何が何でもカイザルに一つ傳道してみたいと云ふ大望心から、訴訟狂(?)になつたのである。そして其機を捕えたのであつた。

突進主義　パウロは男だから非常に突進的であつた。彼は、他人が築いた大きな教會の牧師になどなりたくない。自分は、基督教を少しも知らぬ人の間に福音を宣傳しに行くのだと云つてゐる。

且われ慎みて他人の置きし土臺に建てじとイエスの名の未だ稱へざる所に福音を宣傳へたり(ロマ書十五章二十)

恥	と
誇	と

パウロは男だから恥を知つてゐた。道德の最初の言葉は恥といふ語である。これは社會道德の最初である。そして、尤も本然的な道德である。貧民窟の道德は恥の外に無いのである。パウロのは此原始的な恥を知つてゐた。

恥(ロマ書七章二一)——恥づべき隠れたることを捨て(コリント後四章二)——恥かしめん爲にあらず(コリント前四章十四)——恥かしめん爲なり(コリント前六章五)——我かく云ひて汝等を恥かしむ(コリント前書十五章三十四、コリント後書七章十四、同十章八、十一章二十一)——耻づることなく福音を説く(ピリピ一章二十一)——耻かしめん爲絶交せよ(テサロニケ後書三章十四)

それで、パウロは或場合には此處に擧げたやうに、「お前達は墮落したから、お前達に恥をかゝしてやるのだ」と云ふやうな言葉迄吐いたのである。男は恥を知る。それに今日の人たち！實際恥知らずが多い。彼等は顔に壁を塗つて恥を知らぬのである。彼等は阿片を喰ひ、鐵を飲下して、知らぬ顔をしてゐる。少しは恥を知つたらいゝ。今日の人は、悪事のためには恥を知らないで、善い事のためには恥を知つてゐるのである。女郎や藝妓に戯れる事は少しも恥かしくなくつて善い事は皆恥かしいのである。私達は恥づる事なく福音を説く者でなくてはならぬ。羅馬人の間には正義と云ふ事が非常に發達した。正義とは恥を知る事である。社會心理的に道德を研究すれば、其第一のモオラルは恥であることが分る。



耻の逆倒は誇である。或人はいつでも『神様どうぞ〜』と云つてベツ〜泣いてゐる。然し、眞のクリスチャンは誇を知るものである。パウロは恐ろしく自慢を云ふ。彼は、『誇る所を人に虚しくせられんよりは寧ろ死ぬるは我に善事なればなり』と云ふてゐる。

誇か死か(コリント前書九章十五、十六)——誇の理由(ロマ書十五章十七)

コリント後書は『誇の書翰』である。これ程人間的なそして自己告白の鋭い文學は古代文學には絶無だ。『われ誇るによりて愚かなる者となれり。汝等われを強て如斯なせり』(コリント後書十二章十一)とパウロは云つた。誇か死か? パウロは見得を切つた。そして誇の理由として『エルサレムからイルリコに至る迄』福音を傳へた事を擧げてゐる。そして、其奇跡を行ふたことを自慢してゐるのである。實際私達は、パウロ様エラウ御座いますと云ふ外、仕様がなない。コリント後書は、どこを開いても自慢話ばかりである。パウロは、『少し愚痴をこぼさして呉れ!』と云つた

調子で誇つてゐる。基督信者も、もう少し誇を知つてもいい、私は今日の基督教會と信者に、誇ることを望む者である。私はこれをクリスチャン・ブライドと呼ばう。

パウロは云ふ。『我れ若し自ら誇らんとするとも愚なる者とならず、蓋眞を言へばなり』(コリント後書十二章六)……自慢を云つても愚とならぬ、皆本當の事だからと。

然し『人の我に見る所或は我に聞く所に過ぎて我をはからんことを恐るゝに因りて誇ることを止むべし』と云つてゐる。かう云ふ所に、パウロの無邪氣な、如何にも男らしいところがある。悪い所を潰してやらへば、私達だつて、少しは美しい所がある筈である。其點をパウロのやうに誇つてもそれは少しも差支へのないことである。

パウロには當時の保守的な所があつた。

彼の剃髮(使徒十八章十八)

女と天使との關係に就いて(コリント前書十一章十)等

傳 習  
的 子  
分

彼は何か願事があつたので、其誓願の届くまでは、長髪でゐたが、願果しが了ると、丸坊主になつた。又、女についても、彼の意見は當時の女卑思想



から脱してゐなかつた。キリストは斯う云ふ點は餘程進取的であるが、パウロの觀察には、其時代の色調を帯びてゐるものが多い。

然し乍ら、パウロは耻を知り誇を知る男であつた。忠臣藏の天川屋儀兵衛ではないが、パウロには矢張「使徒パウロは男でござる」と見得を切つてゐる所がある。彼はユダヤ人としての天才であつた。イエス・キリスト、ベルグソン、スピノザを輩出した。ユダヤ人の天才の一人として、充分、資格のある男であつた。

### 第二節 新しき人として

醒  
た  
め  
る  
人

パウロは時代にそゝり立つ新人として、外の多くの人々が寢てゐる時、醒めてゐた。

醒めたる人

(ロマ書十三章十一。コリント前書十五章三十四、同十六章十三。エペソ書五章十四テサロニケ前書五

醒めることは容易でない。パウロは云ふ「他の人の如く眠るべからず目を覺して慎しむべし」と。

醒めてゐる人には、殊に啓蒙時代に於て、先のことまで見える。そして餘り先の事まで分り過ぎて困ることがあるのである。

舊  
と  
新  
き  
人

キリストは新らしい鑄型である。人間が此裡に投ぜられると、そこに新創造として現はれるとパウロは云つてゐる。

汝等已に舊人と其行を脱ぎて新しき人を着たれば互に謙を云ふ勿れ、この新らしき

人は愈々新になり、人を造りし者の像に従ひて智識に至るなり(コロサイ書三章九、十)

我等が外なる人は壞るゝとも内なる人は日々に新たなり(コリント後書四章十六)人キリストに在る時は新に造られたる者なり舊きは去りてみな新しくなるなり(コリント後書五章十七其他ロマ書七章六)



第一の  
ダムと第  
二のダム

彼は又、第一のダムと第二のダムとを區別をする。

第一の人は地より出で、土につき、第二の人は天より出でたる主なり、かの土に屬ける者に凡て土に屬ける者は似るなり、彼の天に屬ける者は似るなり。われら土に屬ける者の狀を有つ。かくの如く後また天に屬ける者の狀を有たん（コリント前書十五章四十七—四十九。ロマ書五章十四）

第二のダムは、第一のダム（人類の始祖）とは、はるかに進化した形に於て、新らしく生れた者として、新しい分子を有つたものとなつて來ると彼は云ふ。

新  
し  
ら  
き  
衣

パウロは、「イエス・キリストを着よ」と云ふ。私は海の中へはいる時キリストを思ふ。

今日のやうな抑壓された重苦しい時代にも、若し我々がキリストを……潜水服の如くに……着てゐたら、呼吸だけは、キリストを通じて、新鮮な空気を吸入されるであらう。

新らしき衣（ロマ書十三章十四）

イエスの衣（コリント前書十五章五十三）

アウガスチンが、或別荘にゐた時、其時彼は、妻君を離別して十六歳の娘を新たに娶らうと考へてゐたのであるが、不圖「キリストを衣よ」と云ふ讚美歌を耳にした。そして、彼は翻然として罪惡の生涯より、パウロの如くに、目醒めたのであつた。

傳  
習  
の  
破  
壞  
者

彼は、傳習を思ひ切つて破壊した。キリストが我々を解放して自由を得させたのだから、再び奴隸生活——傳習に繋がれてはならない。

我パウロ汝等に云ふ、汝等もし割禮を受けなばキリスト更に汝等に益なし（ガラテヤ書五章二）

そしてユダヤ人が神聖視した傳習の一つ——割禮の不要を稱へたのであつた。

自  
由  
の  
靈

ギリシヤ的教育を受けたパウロは古き時代のデモクラシーと自由を知つてゐた。彼は「自由を！自由を！」と叫んだ。

主は即ち彼の靈なり、主の靈ある所には自由あり（コリント後書三章一七及びガラテヤ書）



彼は誠に新しき靈であつた。彼は舊き碎けた靈から、キリストの救によつて悔改めた靈であつた。見よ、彼は罪人の首(テモテ前書一章十五)では無かつたか！彼は自己の靈が因襲(いんしゅう)と傳統(でんとう)に捕はれて浮び上れ無い暗黒の子であつたことを知つて居たのだ。ダマスコ行の途上、妙なる光に照らされて、彼はひとたまりも無くイエスに降参したのであつた。今迄頑強(いままでぐんきやう)であつた彼は三日も眼が開けられぬ程自己の無智を悔いたのであつた。(使徒行傳九章九)

悔ひの涙の爲めに眼が開かなかつたのか、光に眩惑(げんわく)せられて眼があかなかつたかは私の知るところでは無い。兎に角、彼は三日間暗黒の中に据えられて、舊い世界と新しき世界の煉獄(れんごく)に捨てられてあつたのだ。そして見よ。三日の後に彼は全く新しき人間として世界に現れて來たのだ。

彼の目には涙の影はもうなかつた。煉獄の影も見ることとは出来なかつた。彼は姓を體驗した強き新しき人として、地面を濶歩(くわくほ)する男であつたのだ。

### 第三節 超人として

王者として

ニイチエはパウロを奴隸(どれい)的だと云つてひやかすのであるが、然しパウロは王者としての誇(ほこり)を知つてゐた。

汝等すでに飽き、汝等既に富めり、汝等われと儻ならずして王たり、我實に汝等が王たらん事を願ふ。蓋われも汝等と儻に王たらんがためなり(コリント前書四章八)。若し人罪を犯ししにより死この一人に由りし王たらんには況して溢るゝ恵と義の賜を受くる者は一人のイエス・キリストに由り生命に在り王たらざらん乎(ロマ書五章十七)。我等若し忍ばば彼と共に王となるべし(テモテ後書二章十二)。

パウロは『我汝等が凡て王者たらん事を望む』と期待した。王——羅馬のカイザルの如く——威張(いば)れ！と彼は信者を激勵した。

萬有の所有者として

彼は又萬有の所有を考へた。彼は實に大きな事を云つてゐる。彼は繰返し々々萬有の所有者であることを説く。  
萬有の所有者として——死の所有をも含む萬物は汝等のものなり……或はパウロ、或



はアボロ、或はケバ、或は世界、或は生、或は死、或は今のもの、或は後のものは皆汝等のものなり（コリント前書三章二十、二十一）

イエスの心の所有（コリント前書二章十六）

愛ふるに似たれども常に喜び貧しきに似たれども多くの人を富まし何も有たざるに似たれども凡ての物を有てり（コリント後書六章十）

己の子を惜まらずして我等衆の爲に之を付せる者はなどか彼に併て萬物をも我等に賜はらざらん乎（ロマ書八章三十二）

貧乏しても、富んでも、自分の境遇のすぐれてゐる事を彼はよく知つてゐた。

彼は又「われ貧賤に居るの道を知り、また富厚に居るの道を知り、飽くことも飢うることも、豊むことも、歎しきことも、凡ての事に於て我これを熱練せり」（ピロビ書四章十二）と云つてゐる、我々は又これを知らなくてはならぬ。兩方とも——貧に居るの道と共に金權に處する道を——熱練せねばならない。所が多くの人、貧乏の間は宗教的であつても、金持になると之を忘れる。或私の知つてゐる男は、百五

六十萬圓の財産がある間は、決して教會へ來なかつたが、身代限りをしたので、俺も教會へ行かうと云ひ出した事がある。私達は、パウロの熱練に習はなくてはならぬ。パウロは云ふ、神は、萬有を——イエスの——附録として自分に呉れると。私は此等の點に於て慰めの一節をパウロの中に有つ者である。

第一 人 者 として

彼は自らが、道德的に勝れてゐると考へたので「俺に倣へ！」と云つた。私達に此言葉が吐けるであらうか——「俺の眞似をせよ」などと。若し、自分の眞似をされたら、眞似をする人は商賣では高利を食らなければならぬし、或は酔つばらひの眞似をしなければならぬのでなからうが。然し、パウロは、「我が如くなれ！」などと、猛烈な事を云ふのである。

我に倣へ

是故に我なんぢらが我に倣はん事を勸むるなり（コリント前書四章十六）

兄弟よ、願はくば汝等わが如くなれ（ガラテヤ書四章十二）

兄弟よ、汝等みな我に倣ふ者となれ、且、なんぢらの模範となれる我等に循ひて行をなす者を見よ（ピ



「我基督に倣ふ如く汝等我に倣へ」(コリント前書十一章一。同四章十五。テサロニケ前書一章六、テサロニケ後書三章七、九。テモテ前書一章十六)

彼は八回位「我に倣へ」と云つてゐる。  
キリストに代りて贖罪の要求(コリント後書五章二十)

此處が私のパウロの好きな點である。彼は言つてゐるだけは必ず實行してゐるか  
ら偉い。一寸も自分が其通り實行してゐなくつて、「聖書には斯う書いてあります」  
などと云ふ、牧師や、キリスト信者が少なくないが、それでは駄目である。聖書は  
或は焼き棄ててもいい。若し心にそれが書き付けてあればいつでも發掘出来る。支  
那人の或信者は、聖書を創世記から黙示録まで暗記してゐるさうであるが、聖書を  
暗記するよりも偉い事は、それを、實行することである。愛を實行して居れば、キ  
リストは、心の中に復活して來るのである。パウロが思ひ切つて、自分を模範とし  
て其模倣を他人に勧め得たのは、實行が其れの裏書をしてゐたからである。

天の使  
審判者

パウロは又「天の使だらうが何だらうが、審判してやる」と云つ  
てゐる。

汝等われらが天使を鞠かんとするを知らざらんや、況んや此世の事をや(コリン  
ト前書六章三)

我等にもせよ、天よりの使者にもせよ、若しわれらが汝等に傳へし所に逆ふ福音を汝等に傳ふる者は詛  
はるべし(ガラテヤ書一章八)

彼は更に鋭い言葉を發して、「イエスの福音があつたら、それが人間だらうが、天  
の使だらうが、俺が、やつつけてやる」と。天の使をも踏み躪るやうな、何者にも  
少しも怖けない態度を示して居る。彼は實に男であつた。

#### 第四節 強人主義

強人  
パウロ

パウロは、大丈夫の如く強く、闘人として健闘家として立つた。  
彼は實に剛毅であつた。

なんぢら目を醒し堅く信仰に立ちて丈夫の如く剛かれ(コリント前書十六章十三)



我等の心剛し(コリント後書五章六、八)

然れど人の強き所には我も亦強し(コリント後書十一章二十一)

願ふは其榮の富に循ひ其みたまをもて汝等の裏の人を剛健にし(エペソ書三章十六)

主及び其大なる力に頼りて剛健なるべし(エペソ書六章十)

神の榮の權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強くなり(コロサイ書一章十一)

パウロは、或人の如く、おびに、ビー、ビー鳩のやうに啼くのは違ふ。彼は云ふ。「我らの心剛し！」と。

彼はクリスチャンの全能性を力説した。

我は我に力を與ふるキリストに因りて凡ての事を爲し得るなり(ピリピ書四章十三)

全能なるクリスチャン

彼は、道徳的の征服者であるからには、凡てが征服出来ると云つた。數學の發明も、哲學も……如何なるものも、クリスチャンは之を征服する。

クリスチャン・オールマイチー！「凡てのことを爲し得る者」これが、パウロのクリスチャンの定義である。多くの人は、私は何は出来ません、何にも出来ませんと自

分の能力を割引する。然し、パウロは決して自分の有する能力を割引しない。そして、クリスチャン・オールマイチーを稱へるのである。

眞勇主義

パウロは、如何なる場合にも決して退嬰的にならないで、勇敢に邁進した。そして、逆境の裡に「勇め！」と云ふ主の聲を聞いたのである。

眞勇主義(使徒十九章九、同二十三章十一、同二十七章二十四)

眞勇の動機——「キリストの愛、我を勵ませり」(コリント後書五章十四)

パウロは決して自分を隠さない。彼は凡てを曝け出す。自分の長所を誇ると共に自分の缺點をも、其儘、皆投げ出してゐる。彼は神の方へつく超人であると共に、奴隸となつた。



### 第五節 奴隷道德の誇

大	愚
主	義

パウロは——親鸞のやうに——大愚主義を稱へた。今日の人々は餘りに賢明である。それで、パウロは、「少し馬鹿になんない、だまかされなさい」と云ふ。それで彼は、「欺かるゝの善」を稱へた。

汝等互ひに相談ふるにより汝等の誠に過あり。汝等は何ぞ此よりも寧ろ不義を受けざるや、何ぞ此より寧ろ欺きを受けざるや(コリント前書第六章七) 又云ふ人われを愚と思ふ勿れ、然らば汝等われを愚なる者として受納よ(コリント後書十一章十六、十七、二十一)

パウロは随分人の悪い、意地悪な所がある。

我等はキリストの爲に愚なる者となり汝等はキリストに在りて智き者となれり、我等は弱く汝等は強し汝等は貴く我等は賤し(コリント前書四章十)

パウロは逆しまを云ふ。「私はキリストのために馬鹿となりましたが、あなたは、

おかしこくなられました」——猛烈な皮肉な書き振である。

或人はマルクスの唯物史觀を熱心に奉ずる餘りに、キリストの精神主義なんかは止したらいと私に勧めるのである。然し、私達はキリストのために馬鹿になつて置かう。其方が、本當は賢いのである。

私は路傍説教に聲を噴す、或人は賢いからそんな「下等」なことはせぬと云はれる。「我々は高等キリスト教の信者である。路傍説教なんて」と顔を顰めるのである。

然し、私は「下等」基督教の信者であるから、平氣で路傍で傳道をする。もう少し私達はキリストのために愚となる者でなくてはならぬ。

勞	働
主	義

パウロは全然自分自らに裏切つて、自らを他人の奴隷となした。われ衆の人に向ひて自主の者なれど更に多くの人を得んために自ら己を衆の人の奴隷となせり(コリント前書九章十九、二十二)

當時勞働は奴隷の従事するものであるとして、うとまれてゐた。然し、パウロは勞



働を貴んだ。

勞働者として

我等は神と偕に働く者なり(コリント前書三章九)

神と偕に働く所の我等汝等に勤む(コリント後書六章一)

兄弟よ、汝等われらの勞と苦を知る、汝等のうち一人をも累はせざる爲に夜晝工をなして神の福音を汝等に宣傳へたり(テサロニケ前書二章九)

パウロその業を同じくするに因りて之と共に止りて勞働をなしぬ。其業は幕屋を作る者なり(使徒行傳十八章三)

また人のパンを假なしに食する事なく唯人を累はせざらんが爲に、勞と苦をして夜晝工をなせり(テサロニケ後書三章八)

パウロは「神と偕に勞働する我等」と云つて、其頃奴隸のやつた勞働を、貴み、又自ら「朝晩勞働して」其餘暇に傳道した。キリスト信者の或人は、牧師の訪問が少いとが多いとかいづも牧師ばかりあてにして、自分は少しも積極的に福音の爲に骨を折らない。然し、パウロは一方に勞働でもして自活せねばならぬ繁忙な身を以て

福音の宣傳に従事したのである。本當のキリスト信者は此パウロの如くあるべき筈である。彼は「人のパンを假なしに食することなく、唯人を累はせざらん爲に勞と苦しみをして夜晝『勞働』をなしたが、それは『權威なきが故に非ず、たゞ自己を模型として汝等をして倣はしめん爲』であり『われら汝等の中に在りし時、人もし工を作すことを欲せずば食すべからずと汝等に命じたり』と迄云つて、勞働主義を鼓吹してゐる。『働かずば食ふべからず』といふのは、ポルシエビキ一の憲法の一ヶ條であるが、パウロは之を既に二千前に説いて居る。

パウロは、利子や、資本の利潤で食ふべからず、勞働は神聖であるとして、自ら進んで、奴隸のするやうな仕事を喜んでしたのであつた。

パウロはかく、男として、奴隸として、自由自在に、自由の生活をしたのであつた。

我この手は、我及び我と共にありしものの需用に供へし事は汝等の知るところなり(使徒行傳二十章三四)



彼は天幕縫の一労働者であつた。彼は自己の尊嚴を知つて居た。然しその尊嚴は遊蕩なる紳士階級の一員としてでは無くして、聖き一個の労働者として立ち得るの尊嚴であつた。もし今日世界の教會が少しでもこのパウロの精神を知つてゐたならば、今日のように無産者階級から離れたもので無かつたであらうが、悲しい哉、二十世紀の教會は遠くパウロの奉仕生活から離れて居るのである。労働者としての奉仕生活！ 彼は奴隸として罵れつゝも喜んでイエスに仕へ、人類に奉仕したのであつた。

### 第六節 闘人として



パウロは何者をも恐れなかつた。いつでも、勝ち、凡てのものに勝つてゐる。彼は一箇の勇猛な闘人であつた。

彼の戦闘の定義と戦闘力

我等を肉に循ひて歩くと思ふ者あり、我かくの如き人を待ふには勇ましくせんと應へり。唯願ふ所は、汝等に會ふとき此の如く勇ましくせざらんことなり。

我等は肉に在りて歩けども、肉に循ひて戦はず、それ我等が戦の器は肉に屬する者にあらず、營壘を破るほどに神に因りて能あり。我等は神の教に逆ひて建てたる所の凡ての櫓と論を毀し、凡ての意志を擧にしてキリストに服はしむ。我なんぢが全く服はんとし凡ての違逆者を罰せんと既に其備をなせり(コリント後書十章二—六)

Victory unto victory ！ 勝利より勝利へ！ これがパウロの雄姿であつた。唯物論であれ、汎神論であれ、——凡てのアンチ・キリストに對して我々は抗爭を宣してそれに打ち勝たねばならぬ。

一時も争を中止せず(ガラテヤ書二章五)

ペテロへの忠言(ガラテヤ書二章十一)

ユダヤ人の正面攻撃(ロマ書二章十七—二十九)

斯かる人の罪せらるゝは可なり(ロマ書三章八九)

パウロは、勇敢に先輩ペテロをも面責し、同胞(ユダヤ人)の罪惡を堂々と真正面



から攻撃した。

征服者  
し  
と  
て

彼は萬物の征服を考へた。死をさへも征服し、「死は勝に吞まれん」と云つてゐる。

神我等を守らば誰か我等に敵せんや(ロマ書八章三十一)

死よ！汝の刺はいづくにありや  
陰府よ！汝の勝はいづくにありや(コリント前書十五章五十七)

勝利者  
し  
と  
て

彼は、決して敗けない。道德的煩悶に於て勝てると云ふ確信を有つた彼は、すべてに勝つた。彼の勝利者としての強味は此強い宗教的經驗から湧き出でゝゐる。

彼は闘人として、健闘家として、勝利者として、キリストに因つて、勝ち誇る者であつた。

勝を得しむ(コリント前書十五章五十七)  
勝得て餘りあり(ロマ書八章三十七)

勝利は常にあり(コリント後書二章十四)

キリストに由りて勝ち誇れり(コロサイ書二章十五)

我々にもう少し、此ファイチング・スピリット(闘志)がないといけない。そして、我々は凡てのものに對して、勝利者でならねばならぬ。パウロは一面、斯の如き勇猛な闘士でなると共に、足ることを知る哲人生活を味ふ哲人でもあつた。

### 第七節 哲人生活

哲人  
し  
と  
て

足るを知るといふのは、ストイクの系統に屬するロマの一つの哲學であつた。パウロには此靜かな——我足れり——と云つた調子の哲人的な方面がある。或人はいつでも、足らぬ／＼と云つてゐる。

儲けても、貧乏しても。所がパウロはいつでも足つた、足つたと云つてゐる。

神を敬ひて足る事を知るは大なる利なり(テモテ前書六章六、七、八)

「足れり」(ピリピ書四章十二)



「凡てのものよし」(ロマ書八章二十八)

「凡てのこと益となれり」(コリント後書四章十五)

「凡てのもの善かざるなし」(コリント前書六章十二、同十章二十三)

パウロは如何なる状態の裡にあつても満足することに熟練してゐた。此事を勉強した人は偉い人である。貧乏しても、足れり、収監されても足れり、學校へ行けなくても足れりでなくては偉人は出来ない。

パウロは「凡てのもの善からざるなし」——「*in evil*」——と云ふ。悪も善も、傳染病も……凡てのこと、益となれり。泣くとも、涙も、凡てのもの善からざるなし。パウロは全く満足した。何でも善い、凡てが善いと。どうしてさう云ふ事が云へたのであらうか？。

パウロは神の中に這入つた時、此満足を知つた。神自身の自由へ、そして、遍通の世界にはいる時、「凡てが善い」と云ふ消息がわかる。

肺病のベッドに横はつても私共は満足してゐます、味噌汁でも何でも、満足してゐますと云ふ、凡の時に、凡ての事に「足れり」と云へるのでなくてははならぬ。

私がニューヨークの貧民窟へ行つた時、春の低い女の人が、——その女は淫賣婦であつた——盛装して通るのを見た。けれども何となく下品であつた。それと正反對に、英國の婦人がいゝ體格をして質素な風をして電車に立つてゐるのを見た。私は何とも云へぬ美しさを其處に見出したのであつた、美と云ふものは、目から來るものと、行動から來るものがある。行動には、律動的な美がある、うちなる魂がある形を以て、動いてくると實に美しい。私共は、必しもいゝ着物や、豪華の服装をしなくともいゝ。本當に美しい魂を有つて居れば、それが自然に行動に滲み出て、そこに優美な曲線美を表現するものである。であるから、此點に於ても、「足れり」と云ふ工夫を知らなくてはならぬ。

神の自由をパウロは知つてゐた。それで彼はセネカも及ばないキリストの満足を



有つてゐたのであつた。

他人がどんなに自分に當らうが、此満足を知つてゐるものは「凡てのもの善し」と云ふパウロの言葉の偽りでない事を自ら知るのである。

最近の詩の傾向は、溝水の中にも詩を發見しやうとするのである。美は外側になくて内側にある。凡てのものに、こちらの輝きを映し、我々の内なる輝きを運ぶ時に世の中の凡ては、イルミネーションのやうに、輝くであらう。そして失意に、得意に、順境に、逆境に、我々は、神の絶對の自由に、はいる事によつて、足ることを學ぶであらう。

## 第二章 人間線を越えて



第一節 祈禱の生活

第二節 絶えざる黙示

第三節 宣傳者

第四節 神人の域

第五節 死線を越えて

第一節 祈禱の生活

祈禱	の	人
として		

男一正として、脆かつたパウロは、回心と共に妙な新しい経験をした。彼——切れ過ぎた叡智の所有者であつた彼は、今や、人間線を飛越えて、新しい奇跡の世界へはいつたのであつた。そして彼は、自分手に、奇跡を實行し得ることを確く信じたのであつた。彼はかくて神を捉えたのであつた。いや、神に捉えられた事を知つたのであつた。

世界が始まつて以來、キリスト信者程多く祈る者を我々は知らない。詩人、豫言者の祈も驚くべきであるが、それらは平民の祈ではなかつた。所が此處にガリラヤ人——イエス・キリスト——が神の胸を開いたのである。バブテスマのヨハネは祈を弟子に教へたと云ふが、祈の方法を教へる間、神はまだ一の偶像である。人の内なる心が神へ向つて噴火するものが祈である。イエスは人間の記録が有する、最も短



かい祈、そして尤も勝れた祈をしてゐられる。人間線を飛越えたパウロは、祈の力を厚く信じた。

彼の祈に就ては使徒行傳に十一個所、書翰には三十二個所程に出てゐる。以て如何に彼がよく祈つたか知れる。又彼は感謝をした。彼は議論して居て感謝にうつる。彼の祈の文句は實に美しく滑なものである。此外に彼は二十四五個所に祝禱を加へてゐる。彼の友人に祈の人が多く有つた。彼はそれを他人に告げた。彼の祈で最も長くて美しいものはエペソ書三章十五——二十一に出てゐる。

此に縁りて我等の主イエス・キリストの父、即ち天と地にある諸族の彼に由りて名を得し者の父に跪きて願ふは、其榮の富に循ひ其靈をもて汝等の衷の人を剛健にし、又キリストをして、信仰に由りて汝等の心に居らしめ、また汝等をして愛に根ざし、愛を基として、諸の聖徒と偕に測るべからざるキリストの愛を知り、その潤さ、長さ、深さ、高さを識らしめ、又すべて神に満てるものを汝等に満たしめ給はんことなり。願はくば我等の中に行ふ能力に循ひて、我等の求むるところ思ふ所よりも甚しく過れる事を行し得る者に、キリスト・イエスにより、教會の中にて、世々窮りなく榮を歸せんことを。アマメン

と云ふのがそれである。

彼は近代人の如く祈を疑はなかつた。彼は祈の効果の豫想外であることを信じてゐた。

何事をも思ひ煩ふ勿れ、唯事毎に祈禱をし、懇求をし、感謝して、己が求むる所を神に告げよ、神より出で、人の凡て思ふ所に過ぐる平安は汝等の心と意とをキリスト・イエスに因りて守らん(ピリピ書四章六、七)

彼は、何事でもこれを神に告げよと云ふのであるが、此種類の心的經驗は、近代人には判からないのである。機械的に生活してゐる人々は、到底、成長の原理とも云ふべき祈の分る筈はないのである。

成長と  
して  
の祈

祈に依つて人間としての世界が廣がるのである。我々は自分の事を要求するのである。然し實はそれは神のことを要求する事なのである。祈る事は成長を意味する。祈は二重の關係を有つ、即ち自分の要求即ち神の要求である。神の御心の裡に、はいつてゐれば、要求することが、其



儘自分の成長である事が分る筈である。此事が了解されないと、祈りは馬鹿らしくて出来ないものである。私は祈を信ずる、そして祈る。若し生物であつて、要求しない生物であれば、それは生物ではない。凡ての生物は要求する。そして、要求の反面には與へられるといふ約束が含まれてゐるのである。要求してもそれはとても不可充である。だから求めるなと釋迦は教へた。それで彼には祈がない。

然し、祈れば與へられるものである。戀愛の要求があることは、一方にそれに對應する異性のあることを意味してゐる。成長するものは祈る。そしてその凡ての要求は充たされる。人間の欲求は、ある時に飽和する。そこに慾望の限界線がある。イエスは「求めよ！」と、はつきり云つてゐられる。そして神はその求めを充たすのである。パウロは非常に大きな要求を有つてゐた。それは其當時の時代には、何かしら殻があつた。パウロは其殻を打碎いて神の子の自由にはいりたいと求めた。

それ受造者の切望は神の諸子の顯はれん事を待てるなり、そは受造者の虚空に歸らせらるゝは其願ふ所

に非ず則ち之を歸らす者に囚れり。また神の受造者みづから敗壞の奴たることを脱れ神の諸子の榮なる自由に入らん事を許さんとの望を有たされたり(ロマ書八章十九—二十一)

人間の本質の裡に一つの欲求が植えられてゐる。それは神の子にまで伸び上らうとする要求である。凡ての無生物は生物になりたいと云ふ要求を有ち、生物は人間へ、人間は神の子へ飛躍しやうとする願望を有たされてゐるのだとパウロは考へた。かゝる願望を有つ事其自身が一つの成功である。それをパウロは充分に意識した。それで彼はよく祈つた。祈らぬ者より祈る者程、偉い理由は此處にある。

世界の宗教に二つの系統がある。それは、祈禱宗教と、冥想宗教とである。前者は、必ず生命を基礎として、要求を認める。それだから必ず祈を常に是認する。後者は、主として、大抵は價值を云はず、實在を説く。時によると虚無を説く。だから、勿論生命を考へないし、要求を認めない。其特質とする所は、今の世界からの離脱である。



パウロの経験したのは、理屈なしのセミチツクの宗教である。それがキリストに因つて、力づけられ、生命と要求とを是認したものである。祈のない時代は、主として機械的な時代であつて、生命が機械をよう破らぬ時代である。それで實在を無に歸したり、自我を破壊しやうと試みるのである。

デカタン時代  
と祈

戦國時代、又は熱帯地方に於ては瞑想宗教が流行する。そして唯六根清淨を力説して自我の解體を試みるのである。即ち、自然的に、或は社會的に自我の碎かるゝ時には、瞑想宗教が表はれるのである。かゝる時代には即ち、内側から、ウブな生命が、祈の中に爆發する、祈禱宗教は、不可解である。

パウロの時代がさうであつた。當時のローマは其デカタン時代であつた。疲れた時代であつた。その點は世紀末——十九世紀の——とよく似てゐた。當時の世相は、ローマ書によく描寫されてゐる。

自ら智しと稱へて愚魯なるものとなり、朽壞てざる神の榮光を變へて朽壞すべき人、及び禽獸、昆蟲の像に似す。是故に神は彼等を其心の慾を縱肆にするに任せて、互に其身を辱しむる汚穢に付せり。彼等は神の眞を易へて、偽となし、造物主よりも受造物を崇奉りてこれに事ふ。神は永遠頌美べきものなり。アマメン。

これに縁りて神は彼等が恥づべき慾をなすに任せたまへり、其婦女さへも心に神を存ることを好まざれば、神も彼等が邪僻なる心を懷きて行まじきことを爲すに任せ給へり（ローマ書十一章二十二—二十八）

『神は彼等が恥づべき慾をなすに任せ給へり』と云ふのはローマ時代に流行した男色の横行を指したものである。「順性の用を變へて逆性の用となす」とあるのは其れを示すものである。當時は戦國時代であつた。従つて子供が生れると困るので、男色が盛んに行はれたのである。戦國時代にいつでもそんな譯で性の關係が亂れるのである。オスカー・ワイルドの如きも世紀末の男色宣傳者だと考へられて居るのは注意すべきことである。

パウロはそれで『神はもう彼等を棄てほかにした。デカタンになるなら勝手になれ』と云ふのであつた。



次にパウロは罪の目録を擧げた。

すべての不義、悪態、貪婪、暴根を充す者、また妬忌、凶殺、争闘、詭譎、刻薄を盈す者、又讒害、毀謗をなし、神を怒む者、狎侮、傲慢、矜夸、譏詐、父母に不孝、頑梗、背約、不情、不慈なる者、凡て此等を行ふ者は、死罪に當るべき神の制定を知りて、なほ自ら行ふのみならず、亦、これを行ふ者をも喜べり(ロマ書一章二十九—三十二)

これが當時の世界の墮落の實狀であつた。彼等は、かゝる悪行を喜んで實行したのである。パウロは此處に三面記事全部を並べた。當時の凡の罪惡を並べ立てた。そしてパウロは「これを行ふ者を喜べり」と斷定したのである。以て、其當時が如何に頹廢した時代であつたか窺はれる。道德的標準が全く逆しまになつてゐたのである。

元來人間の本質は變化を好むものである。それで何でも逆しまにしてみたいのである。「生命」と欲求の本質が濫れると、善と惡とが顛倒するのである。

パウロは、も一度、此デカダン時代から、新しい生氣を萌え出でる芽をキリスト

中に發見したのである。

今日のある青年たちは、「我らは、耶蘇教にごまかされた、祈だなんて馬鹿々々しい」と云ふのである。パウロは、イエスの教會を、最初の程は、一生懸命に迫害した。所が、反抗すればする程、パウロはいつしかイエスに心を惹かれて行く事を見た。そして、遂に、此アンチ、キリストの第一人者が、「キリストの名に由つて」祈り出したのである。「キリストの名に由つて」などと卑怯なことを云ひ出したのであつた。

私は祈を信する者である。

パウロは、大きな經驗に依つて祈つた。「神さまは、どこに居る?」「神さまは、天の方に居る」さう思つては祈れない。私どもは、祈らしめられることによつて、我々自身が成長すると云ふことが分らなくてはならない。内側に住んでゐる神が、我々を引上げて下さる——それが「祈」である。



パウロの祈は強い。彼は「願ふは、其榮の富にしたがひ、其靈をもつて、汝等の衷の人を剛健にし……また汝等をして愛に根ざし……又すべて神に満てるものを汝等に満たしめ給はんことをなり」(エペソ書三章十五以下)と祈つてゐる。随分これは大きな祈である。今日の人が祈る要求を持つてゐない事に私どもは驚くのである。

私には、要求があり過ぎて困る位ある。

「神よ、五萬五千の娼妓を解放して下さい、二十萬の女坑夫に自由を與へて下さい……」考へればいくらでもある。所が、今日の教會では、そんな事は祈らない。一寸したことしか禮拜の前後に祈らない。日本の國の資本主義への挑戦なんか思ひも寄らぬのである。祈れば、金持の上を撫で廻すやうな祈りしかしない。そんな祈は、恐らく聞いていたかく譯に行かないであらう。

パウロの祈を見よ！『汝等をして愛に根ざし、愛を基として、諸の聖徒と偕に測

るべからざるキリストの愛を知り、その濶さ、長さ、深さ、高さを悟らしめ、又すべて神に満てるものを汝等に満たしめ給はんことなり」即ちこれは神の圓滿性を——神に充てるものを全部人間の中に包含しやうとする祈である。

彼	祈	特
の	の	質

パウロは長い祈をしなかつた。(エペソ書第三章のものが其最長のものである)。彼に非常に短かい祈をするのを常とした。その手紙の始めに、一節二節の祈りを記した。「願くは我等の父なる神及び主イエス・キリストより恩恵と平康を受けよ」(エペソ書一章二)と云ふのは其一例である。

『恵』と『平康』を受けよ！我々の宗教が、『恵』と『平康』である間は仕合せである。かゝる祈はパウロにとつては一つの習慣であつた。いつでも、云ひ道さない。祈が日常生活の習慣になつて來ないと、宗教生活はまだ本當のものではない。米國あたりでも、昔は一寸挨拶するにも God bless you (神さまが祝福して下さい)と云つたものが、今日ではそんな嚴肅な氣風はなくなつて、Good Luck to you (や



前に運が向くやうに)などと云ふ。ニューヨークあたりでは、昔風の挨拶を呪のやうに使用してゐる。これは、歐米に於ける、宗教的精神の衰微を表示する一つの徴候である。

パウロに於ては、祈が彼の日常生活の中に織り込まれてゐた。手紙の書始めと終末には必ず祈りを加へることを忘れてゐない。

救世軍のえらいつは此點——日常生活が其まゝ宗教的に行つてゐること——である。こちらに宗教的の挨拶をする準備がない時に、出し抜けて「ハレルヤ！」などと浴びせかけられて、びつくりする事がある。「神をほめよ」と云ふやうな言葉を日常の挨拶に用ゐたのは、ブース大將の優れた所である。たゞ、救世軍でハレルヤなど、外國語で云はないで、それを日本語に翻譯しないのはもの足らない。宗教はそれが日常語にまで體現されねば駄目である。寧ろ「神をほめよ」と日本語で挨拶したらどうであらうか。宗教はこのやうに、極く普通の意識に、はいつてこぬと何

にもならぬ。又どこでも祈れるのでなければいけない。其點から見れば、パウロの如きは少しも無理がない。

彼は理屈の眞最中にも祈りを始める。「彼等は神の眞を易へて偽となし、造物主よりも受造物を崇めまつりてこれに事ふ……神は限りなく頌むべきものなりアマメン」(ロマ書三章二十五)と云ふのが此例である。こんな風に、議論をしてゐる最真中に彼は祈るのである。パウロは昂奮してくると祈に變るのであつた。これが、彼の偉い所で、外側から喰つ付けた宗教でなくして、天分の宗教家であつた證據である。彼は實に、神に捕へられた祈りの人であつた。

#### パウロの祈

1 自己のため——自ら祈る、主われを救ひ給へ(テモテ書四章十八)

2 祈禱の依頼——彼は六ヶ所にそれを記してゐる(ロマ書十五章三十、コリント後書一章十一エペソ

書六章十八—二十、コロサイ書四章四、テサロニケ前書五章二十五、テサロニケ後書三章一)



祈の友人を有つてゐることは光榮である。

私はビリー・サンデーの祈が好きである。彼の祈は説教と一しよになつてゐる。どこ迄が説教で、どこからが祈りであるかわからない。「これから祈ります」と云つた風の祈と説教と區別をつけることは感心出来ない。

宗教は労働と一しよになつて來ぬといけない。聖書を読むときのみ宗教的であるのでなくして、散歩してゐるときに、労働の最中に、執筆の瞬間に、人と會話してゐるときに、宗教が不斷に流れてゐるのでなくてはならぬ。宗教とは「生命そのもの」であるからである。我々は其裡に始終浸つてゐる工夫を要する。元來「宗教」と「生命」とは二つのものでなく、一つである。

パウロは、自分の爲に友人に祈禱を依頼するのを少しも恥かしいと思はなかつた。それで、彼は、幾度も「祈つて下さい」と人に依頼をしてゐる。

ムウデイは、米國バプテスト教會の先驅者であつて、近代の大傳道者の一人であ

つたが、彼は常に、其教壇の背後に祈の團體を有つてゐた。

パウロもそのやうに各地に——ロマ、コリント、エペソ、テサロニケ——祈の友を有つてゐたのである。「君、祈つてくれよ、頼むよ」と彼は其等の友人に請うたのである。天下擧つて、自分の爲に祈つてゐて呉れる、そこに、パウロの力強い奮闘の力が湧くのであつた。

### 3 他人の祈禱の力を感ず——

この事の汝等の祈禱とイエス・キリストの靈の助とに因りて、終に我が救となるべきを知らばなり（ピロ  
ビ書一章十九）

彼は、他人の祈の力を感じた。そしてそれが他人の祈が、しまひには、自分の救になると信じた。

### 4 祈のすゝめ——

祈を常にし（ロマ書十二章十二）  
常に祈れ（コロサイ書四章二）



斷えず祈れ（テサロニケ前書五章十七）

事々に祈れ（ピリピ書四章六）

萬人の爲又王の爲め祈れ（テモテ前書二章一）

5 祈の場所——何處にも祈れ（テモテ前書二章八）

キリストの祈とパウロのそれとは、少し違ふ所がある。キリストの祈は直接に神に持つて行くのであるが、パウロはイエス・キリストを真中に置く。イエス・キリストといふ段を経て神へ行くのである。

願くば兄弟、父なる神と主イエス・キリストより信仰に加へて平康と愛を得んことを、願くば我等のイエス・キリストを變らずして愛する凡ての者に恩あらんことをアアメン（エペソ書六章二十三—二十四）

主イエス・キリストを通して愛の湧出することを云つてゐる。又、パウロはキリストに直接に祈つてゐる。「イエス・キリストの靈の助に因つて」（ピリピ書一章十九）と云ふのがそれで、キリストが自分を救つて呉れると信じた。

パウロの宗教的經驗は斯様に、屈折してゐた。彼は、キリストが罪ある者を執成

して呉れるので神に行けると考へてゐた。

パウロはしげくと祈つた。どんな所でも祈つた。彼は又、祈のために色々な處へ行つた。或場合には、河の畔へ行つた。（使徒十六章十三）ユダヤ人は河畔を祈の場所とすを習慣があつた。パウロはピリピでは、其處へ行つて祈つた。彼は、監獄の中で祈り、會堂の中で祈り、暴風雨の最中に祈つてゐる。彼はどこでも、機會を捉へる毎に祈つた。彼はまた海岸の砂の上で、跪いて祈つた。（使徒二十章三十六）跪いて祈るのがパウロの習慣であつたと見える。

そのことは使徒行傳の二十一章にも出てゐる。「諸共に濱邊に跪びきて祈れり」（同章五）とある。

聖書の中には、色々な祈の姿勢が記されてゐる。

初代には、手を舉げて祈つた。これは尤も原始的なものであらう。今日それは祝禱の形に遺されてゐる。アラビヤ人は立つたり屈んだりして祈る。神道の祭壇の前に



蓑を綺麗に敷くが、丁度あのやうに、マホメット教徒は「祈りの絨氈」Prayer carpet を持ち廻る。そして其カアペットの上で、メツカの方に向いて、おしげさな身振りをして祈るのである。

其次の時代になると、跪いて祈つた。パウロは跪くのが癖であつた。イエスは「目を舉げて」祈つてゐる。ホフマン・ハントがそれを美しく描いてゐる。今日の基督教會では、「目をつぶつて」祈るのが普通である。然し聖書のどこにも、「目を閉ぢて祈れ」と書いてない。

私は時に、目を開けて祈る、殊に美しい自然の中ではそうする。我々は極く簡単に、何處でも祈れるのでなくてはならぬ、それで、目を開けて祈つてもいいと思ふ。いつ頃から祈の時に目を閉ぢるやうになつたのか私は知らぬ。或は初代にそんな習慣があつて、それが傳つたのかも知れない。今日聖公會では跪いて祈る風がある。所が、スコットランドの教會では直立して祈る。これらの姿勢は、久しき間に出来た一つ

の形式である。跪くのは謙遜な形であつて私は好きである。私も幼い時から跪いて祈る習慣を持つて居る。然し、わざとらしくならない爲に、又、どこでも祈れるために、今日では、さう云ふ形に拘泥してゐない。

パウロはかく床しい祈禱の生活と共に、もう一つ勝れた彼にのみある一つの特権があつた。それは絶えざる黙示である。

### 第三節 絶えざる黙示

瞑	想
と	
黙	示

要求するのみで若し聴かれないものとすれば、祈も案外つまらぬものであるかも知れぬ。所が、パウロには、もう一つの心的經驗があつた。それは、神の聲を聞くと云ふ經驗である。即ち、パウロの祈禱の生活には、此瞑想的分子が加つてゐた。そして彼は絶えざる黙示に觸れたのである。祈はかくて充分充たされるのであつた。日本の教會には、此インスピレーション



の部分ぶぶんが足りないと思ふ。パウロは祈いのちと瞑想めいさうとを一しよにしてゐた。さうなると、一人歩くこと、一人在ることが、一寸も淋さびしい事ことでなくつて、祈の中なかにある喜びよろこびを知ることが出来る。瞑想めいさうと黙示もくしの中なかに浸ひたることは嬉しいことである。私はさう云ふ経験けいけんの中なかに幾度いくども光ひかりを受けた覺おぼえがある。

もつと私わたしどもの生活せいかつにこのインスピレーションインスピレーションの部分ぶぶんがあつてほしいと思ふ。記録きこくに残のこつて居るものによると、パウロは前後ぜんご數十回じゅうしゅうかい黙示もくしを受けて居る。それは、彼の生涯せいがいの危機きき毎ごとに自ら求めずして、神かみから來たものである。

危機に於ける黙示

私は以下したパウロの生涯せいがいの概畧がいりやくと、如何いかに神かみからの黙示もくしが危機ききに臨まむ毎ごとに彼かれを導みいたかを見て行かうと思ふ。

1 ダマスコへの途上とじょう (使徒九章五)

其時そのとき、キリスト自身みづかみが現あらはれて「サウロ、サウロ、何故なにゆゑ我われを窘せまむるや」といふ聲こゑを聞いた。彼はこれに驚おどろかされて「主きりすとよ、汝なんぢは誰たれぞ」と反問はんもんした。其次つぎは、彼かれが、再

度またエルキレムへ行いつた時ときである。

2 エルサレムの神殿かみどのにて (使徒二十二章十八)

それは彼かれがダマスコからエルサレムへ歸かへつて、神殿かみどので祈いのちつてゐる時ときであつた。幻まぼろしの中なかに主きりすとを見たが、其時そのとき、パウロは、「急いそげ、彼等かれらは汝なんぢが我われについて立つる證あかしを納たくげざる故ゆゑに速すみかにエルサレムを出でてよ」と云ふ聲こゑを聞いたのであつた。彼は自分で、勝手かちに歩いてゐると思おもつてゐただけけれど、實じつは、神かみがパウロを引ひつ張ひり廻まわつてゐるのであつた。

3 再度またの上京じやうきやう——『わが上りしは黙示もくしによる』 (ガラテヤ書二章二)

パウロは回心くわいしん後ご十四年じゅうしゅうねん目に、エルサレムへ上京じやうきやうしたが、此行このたびは全く黙示もくしに従したがつたのだとパウロは云いつてゐる。

4 マケドニヤ人の幻まぼろし (使徒十六章十)

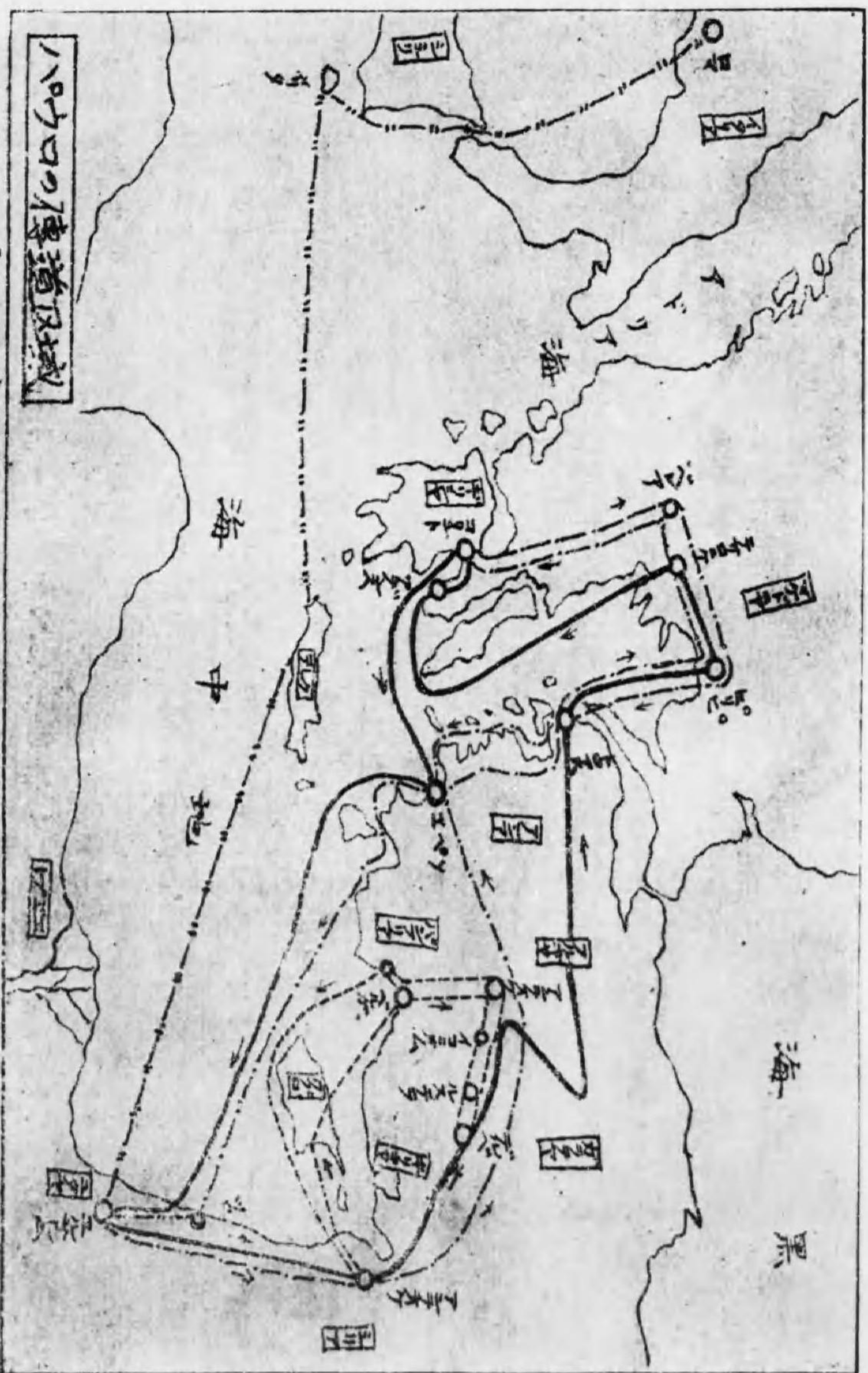
ヨーロツパへ基督きりすと教きやうがはいつたのは黙示もくしによつたのである。『彼等かれらフルギヤとガラ



テヤの地を過ぎし時、アジアに道を傳ふることを聖靈に禁ぜられ、遂にムシアを経て、トロアスに下れり』そして、パウロ達が、トロアスに逗留してゐた或夜のこと、パウロは『一人のマケドニヤ人、立ちて已に請ひ、マケドニアに涉りて我等を助けよと曰ふ幻を見たり。彼が幻に之を見し後、われら誠に主の我等をして、マケドニヤ人に福音を宣しめんと我等を召し給ふことを推量りて、直ちに、マケドニヤに行かん」と記されてゐるのは即ち此時の情況を語るものである。(地圖参照)

【地圖解説】 アンテオケ市と云ふのは、——シリアのアンテオケと、ピシデヤのアンテオケと二つあつた。アジアと云ふのはエペソ附近を指したのである。エペソは當時人口三十萬であつた。今日でこそ二十萬位の町は小さいものだが、鐵道のない其時代に於ては大都市である。

エルサレムは平時二十萬以下(祭の時には三百萬にもなつたが)ギリシヤ文明の中心のアテンスも二十萬以下。ローマは六十萬位あつたが、それで世界最大の都會であ



ハロウロの傳道区域  
 第一回傳道旅行  
 第二回傳道旅行  
 第三回傳道旅行  
 第四回傳道旅行



つた。トロアスは、ホーマーがイリアッド・オデッセイ物語中に書いてゐる、有名なトロイ戦争のあつた古戦場である。

パウロは、地中海を三度も、傳道のために巡回してゐる。

彼	傳	旅
道	行	の

## 第一回傳道

其最初の旅行は、シリアのアンテオケを起點として、

バルナバと二人で旅へのぼつた。これ迄ナザレ人などと呼ばれてゐたイエスの弟子が、クリスチャンといふ名を附けられたのは、此アンテオケに於てである。それから二人は、セルキヤ港に出て、クプロ島に渡り、次に、パンフリヤのペルガへ渡航した。(此處からバルナバの助手ヨハネはエルサレムへ歸つた)それから、ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベに行き、そこから又往路を通つて、パンフリヤに戻り、ペルガからアタリヤに下つて、そこからシリアのアンテオケへ歸航したのが第一回の旅行である。(使徒十三章——十四章)

## 第二回傳道

第二回目の傳道旅行も矢張りシリアのアンテオケを起點として始めら

れた。此時は、パウロはシラスと共に陸路キリキヤに向つて旅を續けたのであつた。其途中パウロは、山容の美しいタウラス山を横斷した筈であるが、彼の手紙は、少しも其事に云ひ及んでゐない、彼は自然に對して、少しも趣味を持たなかつたと見える。それは餘りに傳道に熱心であつたからだと思はれる。或は目が悪かつた爲かも知れない。パウロの手紙には、自然に關する譬喩が極めて少ない。ラムゼーが此事を述べて不思議がつてゐる『どうして、此タウラス山程美しい山の記事が少しも記されてゐないのであらうか』と。

一體、自然を自然として記した文學は、ギリシヤには無かつた。あつてもそれは、著しく人間化されてゐる。ホーマーが川を描寫したが、それも少なからず人間化されてゐる。自然を自然として眺めるやうになつたのは、極めて最近になつてからである。尤も日本では、人間が醜かつた爲か、自然が美しいためか、自然が文學の中に著しく多く描かれてゐる。



パウロは、キリキヤを経て、デルベ、ルステラ（そこからテモテを弟子として連行し）更に進んでアジアの方へ行かうとしたが、聖靈に禁じられたので、止むなく、アジア行を中止した。パウロの考では、エペソへ行つて、そこを顛覆することによつてアジアを衝く積りであつたらう。そして、トロアスへ行き、黙示に因つて、マケドニヤに渡り、ビリビへ向つたのであつた。パウロはエペソ行を禁止されたが、何處でどう云ふ人と廻り合はすか分らぬものである。パウロは、ビリビで、エペソ地方から来た女——ルデヤに出會した。それでビリビでエペソ傳道が出来、ルデヤが歸郷して後、エペソ傳道の門戸が開かれたと云ふわけであつた。

パウロはかくて、ルカを一行中に迎へて、アムビボリス、テサロニケ、ペレアを経てアテンスへ渡り、次に、コリントへ移つた。此處で一年半あまり傳道をした。

コリントは中々傳道の困難な所であつた。此町は——云はゞ——神戸のやうな開港場であつた。コリントは、狭い地峽にあつた。ネロ皇帝が、多島海とアドリアチ

ツク海を連絡する運河を掘らうと試みたが失敗した。確か十九世紀になつて漸くにして運河が開通したと思つて居る。さう云ふ町の常として、風儀が悪るかつた。パウロはそれでも一生懸命に傳道に心を凝してゐたが、ユダヤ人が之に反對して、パウロを誦るので、パウロは衣を拂つて、『汝等の血は汝等の首に歸すべし。我は咎なし、今より異邦人に行かん』と云つて、ユストと云ふ人の家に移つて異邦人を目當にして傳道を始めた。

所が、ユストの隣家が、會堂であつた。その長老の頭のクリスボの一家が、改心者となつた。然し、中々反對が多くて、パウロは、失意と絶望の中に沈んでゐた。所が其時、彼は黙示を受けたのである。

5 コリントにて——『黙せずして語るべし』（使徒十九章九）

パウロが、迫害に出遭つて辛うじて講義所をわきに移した。すると其時、力強い主の激勵を受けた。



主或夜幻にてパウロに語り給ひけるは、懼るゝなかれ、黙せずして語るべし。蓋われ汝と偕にあれば、汝を害せんとて責むる者なし。且邑に我が多くの民あり。

此言葉は、福音の傳道者に向つての慰めである。骨折つても其結果がないのに、悄然としてゐるとき、「しつかりやれ、黙せずして語るべし、尙多くのわが民あり」と云ふ聲を聞くなればどれ程、力づけられる事であらう。私はいつでも、考へる。東京の中に、大阪の中に、神戸の中に、日本の中に、「尙多くの民あり、黙せずして語るべし」と云ふ聲が響いて来るかのやうに。

コリントに一年半滞在して後、パウロはシリアに船出し、途中、エペソに一寸立寄り、そして、カイザリヤを経て、エルサレムへ上り、次いで、シリアのアンテオケへ又もや戻つた。これが第二回旅行の始終である。(使徒十五章三十五—十八章二十)

**第三回傳道** 第三回の旅行はシリアのアンテオケから、ガリラヤ・フルギアの地を巡訪して、エペソに三年逗留し、次いで、トロアスから、ビリビ、テサロニケ、ベ

レアを経て、コリントへ行き三ヶ月其處にゐて後、其町の港ケンクレアから、スリアへ直航しやうとしたが、ユダヤ人の隠謀のために、往航を経て、トロアスへ戻り、アソスから船に乗り、ミテレネ、サモスを経て、ミレト港に着き此處で、エペソの長老達と送別の挨拶を交はし、又舟にてバタラに行き、こゝでフィニシア行の直行船に乗換へて、ツロへ上陸した、それから、トレマイへ舟行し、カイザリヤを通つてエルサレムへ向つた。

此第三傳道の途中で、特記すべきはエペソ傳道の模様である。

エペソでパウロは傳道を開始したものの最初の三ヶ月は、誰も聴きに來ない。殆んど結果が表はれて來なかつた。それで、パウロは、今迄の方針を變更して、直接傳道を中止して、彼は、當時の學者のやり方に倣つて、テラノと云ふ人の學校のやうな講堂で講義を始めた。そして、二年の間、それを續けた。傳道も一本槍では駄目である。機轉をさかす事が或場合には必要である。それで、エペソの市民に、バ



ウロの學問のある事が分つて来て、エベソの智識階級は、殆んどパウロの説を聞かない者は無い位になつた。『二年の間、かくありしかばユダヤ人も凡てアジアに住める者悉く主の言を聞いた』のであつた。所がパウロの傳道によつて、此町の迷信な人々、魔術を業としてゐた人々が、大層動かされて改心し、呪文などの記してある本を山のやうにパウロの前へ積み上げて焼いたのである。其價が、五萬圓からにのぼつたと云ふから隨分の量であつたと考へられる。此時のパウロの得意顔が、思ひやられる。所が、そんな風に激烈に福音が勝利を得て來たので、此町の守護神、女神アルテミスの銀籠の細工を業として渡世してゐる連中が、パウロをやつつけてしまはぬと食えぬといふので町中、でんぐり返るやうな大騒動になつたのである。そして、大きな民衆の運動が起されたのであつた。(使徒二十章)そして遂に彼は、町から放逐されたのであつた。パウロが如何にエベソで苦勞したかについては、使徒行傳二十章十七以下に明らかである。

かゝるエベソ傳道の導因も外國への導きも凡て、默示によつてなされたのであつた。

6 エベソにて——『我また神の靈に感じたりと意ふ』(コリント前書七章四十)

7 ミレトスにて——『たゞ聖靈邑毎に我に示していふ。縲紲と患難我を待てり』と。(使徒二十六章二十三)

パウロがツロに着いた時であつた。その弟子を訪問して七日過したところ、其弟子たちは、靈に感じて、パウロたちに、「エルサレムに行くな」と云つて止めるので「我ら——ルカも一緒であつたのでかく記す——出たちて途につく」其時の模様を述べてゐる。かくて、カイザリヤへ行き一行は、ピリポの許へ投宿した。此ピリポには四人の娘があつて、皆預言をした。そこへアガポと云ふ預言者がユダヤから來て、パウロの帶を取つて、自分の足と手とを縛つてみせ、「聖靈がかく言ひ給ふ「エルサレムにてユダヤ人、この帶の主を斯の如く縛りて、異那人の手に付さん」と」



云ふのであつた。それを聞いてパウロの友人たちは、エルサレム行を諫止したが、パウロは「なんぢら何ぞ歎きて、我が心を挫くか？ 我、主イエスの名の爲にはたゞに縛らるゝのみならずエルサレムにて死ぬるも亦甘んずる所なり」と答へてゐる。之れで第三回旅行は了つた。

8 エルサレムにて……

「主その夜パウロの側に立ちて云ひけるは「パウロよ、勇め！ 汝は汝われに就いて汝エッサレムに證しせし如く必ずロマに證しすべければなり」(使徒二十三章十一)

其後、彼はエルサレムで——パリサイ人とサドカイ人の論争からして大騒動となり「千人の長、パウロが彼等に引裂かれん事を恐れて兵隊に命じ彼等の中に下らせ、之を奪取りて陣營に引入らしめた」(使徒二十三章十)——そして、パウロが獄中で煩悶してゐる時、彼は、「パウロよ、勇め、汝ロマにても證をなすべし」と云ふ主の激勵を聞いた、混亂の最中に、彼が兵營の真中に据えられて考へ込んでゐる時に、パウロ

よ、勇め！ Be courageous Paul！ と云ふ聲を聞いたのである。パウロは此黙示に、武者振ひをした。此處は非常に英雄的な場景である。今日社會の暴風雨の最中に在る我々も、又、此聲を聞いて奮起すべきではなからうか。

9 船中にて——「神の使者、この夜、わが側に立ちて、「パウロよ懼るゝなかれ、汝必ずカイザルの前に立つべし、且、神は汝と共に舟にある者を悉く汝に賜ふ」と曰へり。是故に人々勇めや、かくわれに語り給へる如く必ず成らんと我れ神を信ずればなり」(使徒二十七章二十三——二十五)

それはロマ行の航海中の出来事であつた。パウロ等を載せた船がマルタ島附近で大暴風雨に遭つた。それはアフリカから吹くシロツコと云ふ風で、大抵地上一丈乃至一丈五尺の高さを吹く。それで此シロツコが吹くと地中海は恐ろしい嵐となる。其暴風雨の渦中に、パウロは、「懼るゝ勿れ」と云ふ、強い勵ましを聞いた。

パウロは、叙上の如き幻と黙示を、その傳道生活の危機毎に神から與へられたのであつた。宗教生活は、平凡な時に、神様の恵みを、或は、受けなくてもいゝかも



知れぬ。然し危機に臨む毎に神の恵みに與かる事が出来なくてはならぬ。そして、それには不斷から準備がなくてはならない。我々には色々な危機がある。學校の卒業前後、結婚、大病、恐慌來——色々なシロツコが襲來する。其昏迷の最中に、神の聲を聞いて武者振ひをするのでなくてはならぬ。「懼るゝ勿れ、勇め！」といふ聲に答へて、我々は奮起して、「イエスさま行きますよ。しつかりやりますよ。」と雄々しく答へなくてはならぬ。

絶えざる黙示！

これは實に、特にパウロの有した一大特權であつた。

其他コリント後書十二章九にもパウロは神の黙示を受けて居る。「我に言ひ給ひけるは我が恩恵汝に足れり。蓋、わが能は弱きに於て全くなればなり、此故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん、これキリストの能われに寓らん爲なり」参照

パウロ傳年表

——ウキリアム、ラムゼーに依る——

事	實	年	代	摘	要	聖書引照
<b>沈黙時代</b>						
一	パウロの悔改とアラビヤ退隱	二六年より三四年	.....	.....	.....	ガラテヤ書一ノ七
二	第一回上京	三五年	.....	.....	.....	ガラテヤ書一ノ十八、十九
三	スリア、キリキア、タルソ、アンテオケミ	三五年より四三年	.....	隠れたる九年	.....	ガラテヤ書一ノ二十一、二十二、二十三、二十四
四	第二回上京慈善事業	四六年	.....	.....	.....	ガラテヤ書二ノ十
<b>傳道時代</b>						
五	第一傳道	四七年三月より四九年七月、八月まで	.....	.....	.....	使徒十三章—十四章
六	第三四上京	五〇年三月より五〇年四月まで	.....	.....	.....	使徒十五章
七	第二傳道	五〇年三月より五〇年四月まで	.....	.....	.....	使徒十五ノ三十五—十八ノ二十
八	テサロニケ前後書	後書五〇年春 前書五〇年秋	.....	.....	.....	.....



論争時代		監獄時代	
九 ガラテヤ書	五三年五月まで	スリア、アントオケより南ガラテヤに	使徒十八ノ二十三、二十
十 第三傳道	五三年六月より五七年五月二十八日	最後に第五回上京	六
十一 コリント前後書	前書五五年十月後書五六年夏	前書はエベソよりテモテにてベレア附近よりテモテにて	コリント前書十六ノ八
十二 ロマ書	五七年一月頃	コリントよりケンケレアの女執事フイベにて	ロマ書十六ノ一
十三 聖都にて捕縛 カイザリヤ入獄	五七年六月より五九年まで		使徒二十一ノ十七—二十 六ノ三十二
十四 羅馬護送	五九年		使徒二十七—二十八ノ三十一
十五 ビレモン、コロサイ エベソの諸書	六一年初め	ロマにて	
十六 ビリビ書	六一年終	ロマにて	
十七 放免及第二囚	六一年終—六七年		
十八 牧會書翰テモテト	六四年—六七年	第二入獄中か	
十九 死	六七年		

### 第三節 宣 傳 者

宣 傳  
の 義

彼は尤もすぐれたプロバガンヂストであつた。或人は云ふ。「真理は宣傳しなくともいゝ」と。然し乍ら、パウロは其一生を賭して猛烈に宣傳に従事したのであつた。

若し、基督教が、個人宗教で終始するなら傳道の必要はないかも知れぬ。然し眞の個性が——第二の個性の生れることを要求するならば、そこに、始めて眞性の社會宗教が発生する。

元來、民族宗教は、血族社會即ち生理的社會を中心とするが、更に一段進化すると個性化した社會——心理社會を足場としての宗教が生れる。「我母は誰ぞ——我兄弟は誰ぞや、……天に在す父の旨を行ふ者は、これ我兄弟、我姉妹、我母なればなり」(マタイ傳十二章五十)と云ふイエスの言は、即ちそれを指すものである。個性化



が極端に行くこと、それは自然に社會化する。ごく個性化して始めて社會的になり得るのである。宗教が生理社會に嫌たらずして、——基督教はそれである——個性化した時に、始めて社會的になり、本當の意味に於いての世界宗教になるのである。民族や種族にひつかかつてゐる間、到底世界的になれぬ。我々が、國土よりも、家庭よりも、眞理其自身——神それ自身の裡に没入する時、始めて社會的に更生するのである。そして、眞の意味のプロバガンダが分つて來るのである。

或人は、『自己の充實が第一ですから、傳道なんか思ひもよりません』と云ふ。そんな人には、傳道をして貰はなくつてもいい、そんな人は、永久に自己の充實すら計れない人である。太陽は、語らず、云はずして其熱を地球に傳達する、其如く、若し、私達の裡に、宗教が燃え上つてゐるならば、誰に勧めらずとも、自分でずん／＼宣傳を始めるであらう。パウロは之に就て次の如く云ふて居る。

蓋、もし汝口にて主イエスを言ひ表はし、又なんぢ心にて神の彼の死より甦へらし、を信せば救はるべし。

しそれ人は心に信じて義とせられ、口に言ひ表はして救はるゝなり。

聖書に凡て彼を信するものは辱かしめられじと云へり。ユダヤ人とギリシヤ人の別なし、蓋、凡ての者の主は唯一つなればなり。おほよそ、之を願求むる者は、恩恵を豊かにし、凡て主の名を願求むる者は救はるべし。

然れど、未だ信ぜざる者を如何で願求むることを得んや、未だ聞かざる者を如何で信することを得んや、未だ宣ぶる者あらずば如何で聞くことを得んや。もし遣はされずば如何で宣ぶることを得んや。録して和平なる言を宣べ、また善事を宣ぶる者の其足は美しき哉とあるが如し。然れども、悉く福音を聽従しに非ず、イザヤ曾つて、主よ我等が宣ぶる所を信ぜし者は誰ぞ乎と云へり。然れば、信仰は聞くより出で聞く所は神の言葉に由れるなり。我問はん、彼等は未だ聞かざりしか聞けり。其聲は偏く世界に出てその言葉は地の極にまで及べり(ロマ書十章九—十八)

イエスは、『父なる神中心』であるが、パウロの宗教は、『キリスト中心』である。彼はキリストの中に人類が一度再生し得る力を見出した。パウロは此福音を宣べずにゐられなかつた。それは、ユダヤ人ギリシヤ人のへだて——民族的生理的關係なしに——を超へて人を救ふ福音である。然し『未だ宣ぶる者あらずば、如何で聞



くことを得んや。』

われ福音を宣傳ふると雖も誇るべき所なし、已むを得ざるなり。若しわれ福音を宣傳へずば實に禍なり  
(コリント前書九章十六)

彼は、傳道の心に燃えてゐた。彼は、『若しわれ好みて之を行さば賞を得ん、若しわれ好まざるも其責任は我に與れり。然らば、我が賞は何なるや、われ福音を宣傳ふるに人をして費なくキリストの福音を得しめ、又福音に在りて我有てる權を妄りに用ゐざる即ち是なり』(コリント前書九章十八)と云つてゐる。『好むにしても、好まないでも自分は傳道をしなくてはならぬとパウロは考へた。それで、彼は、『時を得るも時を得ざるも勵みて』宣傳に従事したのであつた。

數人を  
得ん  
ため

それなら、パウロはそれ程懸命に傳道して、どれだけの人を得やうとしたのであつたか。

これ我骨肉の者を如何にしてか激まし其中より數人を救はんが爲なり(ロマ書十一章十四)

柔弱者には、我柔弱者の如くなれり、これ柔弱者を得ん爲なり、又、すべての人には我その凡ての人の狀に循へり。これ如何にもして、彼等數人を救はん爲なり(コリント前書九章二十二)

パウロは、たゞ數人を救へばいゝのだと云つた。ハドソン・テラーと云ふ人がある。彼は、支那傳道に一生を捧げたのであつたが、一生の間に、唯の一人だけの信者を得た。五十年かゝつて唯一人の信者!、何といふ下手な傳道師だと人は云ふかも知れぬ。然し、彼は、其間に百年の大事業の基礎を支那に、据えたのである。私は一九二〇年、上海へ行つた。そして、テラーに基する、チャイナ・インランドミッションの盛んな傳道事業を見たのであつた。

明治の初年、クラーク先生は、時の北海道長官、黒田侯爵に招かれて、札幌農學校へ赴任したのであるが、彼は横濱を出航して、黒田長官と共に北海道に向ふ途中學課制定のこと其他種々協議が重ねられ、最後に『農學校が生徒の道德教育の基本として聖書を是非使用しなくてはならない』とクラーク先生は主張したのであつたが、



中々それは、聞入れられなかつた。そして、兩人の間に激論が戦はされたが、遂に函館へ着く前、到頭、黒田長官は、クラーク先生の前に胃を抜いたのであつた。

そして、クラーク先生の傳道の結果は、遂に、札幌農學校から、内村、新渡邊、佐藤等……の有数の人物を生み出したのである。そして、今日、同大學は、ミツシヨンスクールでないに係はらず、數百名の基督信者があつて、寄宿舎なども、舎監一人無しに立派に自治の實が上つて行くと云ふことである。クラーク先生が、日本に止まつてゐたのは、たゞの八ヶ月であつた。そして、彼は、其間に、數人を得たのである。パウロが『數人を救はん』ことを其傳道の目標としたことは、流石に彼の眼識の高さを示すものである。我々は一生涯の間に、數人を——しつかりした數人をイエスにまで得ることが出来たら、幸である。

彼はまた、自ら、福音宣傳の開拓者たるを以て自任した。決して他人の傳道した所へは行かないで、未開墾の世界へと突進するのであつた。

#### 開拓者として

且われ慎みて他人の置きし土臺に建てじと、イエスの名の未だ稱へられざる所に福音を宣べ傳へたり  
(ロマ書十五章二十)

此處にも彼の男としての意氣を見出すことが出来る。彼は、福音に由つて他人を産むのだと云つてゐる。如何に彼が、一人の人の救のために苦勞したか、窺はれるのである。

#### 福音によれる誕生

汝等キリストに在りて縦ひ師は一萬ありとも父は多くあることなし。蓋、われキリストイエスに在りて福音を以て汝等を生めばなり(コリント前書四章十五)

我がおきな子よ、我なんぢらの心にキリストの狀成るまでは、復び汝等の爲に産の劬勞をなす(ガラテヤ書四章十九)

此等の言葉は、如何に彼が宣傳者として、眞劍であつたかを示すものである。

福音道樂 コリント後書十二章十一「我キリストの爲に懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭ふを樂とせり、蓋われ弱き時に強ければなり」



### 第三節 神人の域

奇跡  
と  
自信

パウロは奇跡の可能を信じた。否、彼自ら奇跡を實行した。

それ汝等に靈を與へ、且奇跡を行はしめ給ふ者のかく爲すは、汝等が律法を行ふに由りてなる乎、又は聞きて信ぜしに由りてなる乎、(ガラテヤ書三章五)

即ち我等の主イエスキリストの名に由りて、汝等の集らん時、我靈も借に在りて我等の主イエスキリストの能により、かくの如き者をサタンに交し、其肉體を滅し、其靈をして、主イエスの日に救を得しめと定めたるなり(コリント前書五章五、六) われ休徴と奇跡と妙用をもて汝等の中に多く忍びて使徒の證をなせり(コリント後書十二章十二)

パウロの時代には、一般に奇跡の可能が信ぜられてゐた。それであつたから、パウロは奇跡に對しても強い自信を有つてゐたのであつた。

天界地  
界との  
靈通

ギリシヤ人は、天が七層から構成されてゐると信じてゐた。土星の天、水星の天、火星の天等であつた。そして七層の天の最下層に地球が置かれて、一番呪はれてゐると彼等は考へてゐた。

われキリストに在る一人の人を知れり、此人十四年前に携へられて第三の天に至る。(或は肉體に在りしか我知らず、或は肉體の外に在りしか、我知らず神知りたまふ)我此人を知る(彼、或は肉體に在りしか或は肉體の外に存りしか知らず、神知り給ふ)彼携えられてパラダイスに至り言ふべからざる言葉即ち人の語るまじき言葉を聞けり(コリント後書十二章二—四。コリント前書六章三、其他十數箇所)

パウロは、或批評家の説に従へば「彼は自分のことを「或人」と三人稱で呼んで、第三の天の上に靈に通た事を記してゐる。キリストは、此七つの天を裂いて地上に降つたのだと云ふ信仰をパウロは有つてゐた。これは其當時の靈智學である」と。

神子顯  
現の  
希待

彼は、また神の子が此宇宙に顯現することを希待した。そして、自らを「神の奥義を司どる家宰」であると云つてゐる。

それ受造者の切望は、神の諸子の顯はれんことを俟てるなり(ロマ書八章十九)

新しき  
創造

人よろしく我等をキリストの役者の如く神の奥義を司どる家宰の如く意ふべし(コリント前書四章一)

不思議なる生命の世界に、不思議な救の力が現れ、今迄の不完全な世界を救済するのみならず、更に新しき創造の世界に這入らしめると考へたのがパウロの思想であつた。現代語で云ふなら、新しき進



化の領域に進むと考へる可きものであらう。然し、パウロの當時には進化と云ふ言葉が無いものだから、彼は新創造の言葉を作つて居るのである。

是故に人キリストに在る時は新に造られたるなり、舊きは去りて皆新しくなるなり（コリント後書五章十七）夫れイエス・キリストに於ては、割禮を受くるも受けざるも益なく、唯新たに作られし者のみなり（ガラテヤ書六章十五）

神に象りて眞理の義しきと、潔きとにて造れる新人を衣るべし（エペソ書四章三十四）

### 第五節 死線を超えて

死  
に  
面  
して

神人の域に出入したパウロには最早、死ぬと云ふことに就いての屈託は少しも無かつた。それで、自分はどんなにせられても不死身だとも云つてゐる。

われら四方より患難を受くれども窮せず、詮方盡くれども望を失はず迫害らるれども棄てられず、跌倒るれども亡びず、われら何處に行くにも常にイエスの死を身に負へり、此はイエスの生けることを我等

の身に顯はれしむるなり。

それわれら、生ける者の常にイエスの爲に死に付さるゝは、イエスの生けることを我等が死ぬべき肉體に顯はれしむるなり、斯くて、死は我等に働き、生は汝等に働くなり、録して、我信ずるによりて言へりと有るごとく、我等も此の如き信仰の靈あれば、信ずるに因りて言ふなり。われらは主イエスを甦へらしゝ者のイエスと偕に、我等をも甦へらせ、亦われらをして、汝等と偕に立たしむることを知れり、萬事は皆汝等の益となれり、此はその鴻恩、おほくの人の感謝に由りて神の榮を顯はさん爲なり、是故にわれら臆せず、われらが外なる人は壞るるとも内なる人は日々新たななり、それ汝等が受くる片時の輕き苦は極めて大なる窮なき重き榮をわれらに得しむるなり（コリント後書四章八—十七）

パウロは、屢々逆理を云ふ。「死は我等に作用して、生命は汝等に働く」と。丁度、それは、蠟燭の火のやうに、光明を放散すればする程、自らは細るのである。

彼は又、一度ならず瀕死の境に落入つたのであつた。「われ……死に遭ふこと屢々なり」（コリント後書十一章二十三—三十一）と云つてゐる。殊に彼は、アジアに於て、非常な苦難を嘗めた。「兄弟よ、我等が、アジアに於て遇ひし所の苦難を汝等が知らざるを好まず、即ち責めらるゝこと甚しくして勢當り難く、生命を保たん望をも失ふに至



れり、且我等心の中に必死を定む、是故に己を恃まずして死にし者を甦らす神を恃めり』(コリント後書一章八—九)と其事を述べてゐる。

それはパウロが第一傳道旅行の途次、ルステラへ行つた時であつた。一人の跛者を癒した事から、恐しい騒ぎになつた。パウロの言葉に従つて、此跛者が踊り上つて歩み出たのを見たルステラの市民は、バルナバとパウロとを生神様に祭り上げやうとしたのであつた。バルナバは風采が堂々としてゐたので、主神ゼウスに、パウロを使者神ヘルメスに型どつて、ゼウスの祭司は犢と、花飾とを持出して、此二人に犠牲を献げやうとした。されど、バルナバとパウロとは、吃驚して、自分の衣を裂いて群衆の中に走り出て、自分達が決して神でない由を辯明したのであつた。こんな風に群衆は二人を祭り上げてゐるかと思へば、次の瞬間には、アンテオケ、イコニオムから來たユダヤ人等に、煽動されて、パウロを石こづめにしたのであつた。そして最早絶命したと考へたので、パウロを町の外へ棄てたのであつた。群衆

が如何に移り氣であるかは、之を見ても分る。幸にパウロは、生命拾ひをして起上り、次の日にはバルナバと共に、デルベへ、生命からく移つたのである。(使徒十四章八—二十)

死の  
覺悟

彼は死を豫覺して少しも狼狽しなかつた。十字架が近づくことを前以て充分に覺悟してゐた。

われ今祭物とならんとす、我が世を去る時期、近づけり(テモテ前書四章五)

最も美し  
き死の  
超越者

彼はどんな逆境に落入つても少しも屈託しなかつた。何にでも遍通自在であつた。彼は、神の中に遍通してゐたから、凡ての人間線を越え、死線をすら突破して、勝利者の如く進んで行くことが出來たのであつた。これが眞の宗教生活である。

且われら凡ての事に於て己れの神の役者の如く行ひて己れの義を人に顯はせり、即ち多くの忍耐にも患難にも、窮乏しきにも困苦にも、責打るゝにも、獄に入るにも、擾亂の時にも、勤勞にも、睡らざるに



も、食はざるにも、貞潔のことを、知識と、恒忍と、仁慈と、聖靈と、偽なきの愛と、眞の道と、神の能と左右にあるところの義の武器を用ふ。また、榮耀、羞辱、惡名、令聞に因りて己の義を人に顯はせり。人を惑はす者に似たれども眞實、人に知られざるに似たれども、人に知られ死にたる者に似たれども、生ける者、責を受くる者に似たれども、殺されず、憂うるに似たれども常に喜び、貧しきに似たれども多くの人を富まし、何も有たざるも凡ての物を有てり（コリント後書六章一―十）

死は益なり（ピリピ書一章二十一、二章十七）

これは實に美しい死の超越である。パウロは、融通、遍通の世界に住んでゐた。

神の自由の中にはいつた彼には、世界の何者も苦痛を彼に與へないのであつた。或人は一生クヨクとして、毎日を送り、事毎に屈託をしてゐるのである。

私どもも又、此神の自由の世界にはいつて、神の中を遍通を見出す者とならなくてはならぬ。

### 第三章 内觀のパウロ



第一節 衷なる人の研究

第二節 良心の圓周

第三節 彼の感情の解剖

第四節 愛に就ての彼の徹底

第五節 詩人としてのパウロ

## 第一節 衷なる人の研究

自	我
の	
穿	鑿

パウロに於て尤も痛快な事は、自分を明らさまに批判をして、少しも隠し立てをせぬ點である。彼は内なる人を掘つて行けば行く程其眞底に神の攝理が見出されるのであつた。穿つて行けば行く程、彼は神の力をそこに感じた。こそが人間線を越えた所のパウロであつた。

内省的に自我を掘ると共に、彼は、神の旨を發見した。即ちそれは内面的と共に、超越的であつた。自分を掘り下げれば掘り下げる程、そこに自我以上の或ものに出會はすのである。斯くて超越的な分子が内在的に見出されるのである。此内なる生命に就いてパウロは屢其手紙中に述べた。

願ふは其榮の富に循ひ其靈をもて汝等の衷の人を剛健にし(エペソ書三章十六)  
是故に我等應せず我等が外なる人は壞るゝとも内なる人は日々新たに新たり(コリント後書四章十六)



蓋われ内なる人に就いては神の律法を樂しめどもわが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ我を擲にして我が肢體の中に居る罪の法に従はざるを悟れり(ロマ書七章二十一)

この新らしき人は、愈々新たになり人を造りし者の像に従ひて智識に至るなり(コロサイ書三章十)

彼は外なる人の破るゝとも、内なる人が、段々に新らしくなるのを經驗した。外なる人には、一つの約束があつて、不自由であるが内なる人に於ては、神の律法を樂しむ事か出來た。彼の『内觀の人』は日に日に更新するのであつた。パウロは幾度も内なる人に就いて述べてゐる。これは、自覺した宗教でないと思ひ及ばざる點である。

従つて、パウロは、良心といふことを、喧しく云ふのである。世界で、良心を云ひ出した尤も大なる宗教は、基督教である。印度のバラモン教には、良心と云ふ言葉が無い。ギリシヤでは、ストアックが、哲學的に良心を説いた。それで、基督教は Good conscience (良心) が、はいつたのはギリシヤ哲學の感化である。パウロに於ては、内觀の分子が強くなると共に良心が増し加はつたのであつた。

### 第二節 良心の圓周



印度の婆羅門教には良心と云ふ言葉が無い。日本の神道にも良心はない。兎に角、基督教の強味は、此良心生活の豊富な所にある。尤もそれには外國の感化——ギリシヤ宗教の感化を多分に受けて來た。

ギリシヤ宗教の發達の階段は、大體、四段になつてゐる。それは

1 自然宗教 2 社會宗教 3 心理宗教 4 救濟宗教の階梯を経てゐる。そして第三の時期に始めて、良心が發生し、清淨について喧しくいふやうになつた。それが更に、外側の清淨よりも、內的に考へるやうになり、内なる人を凝視すればする程、そこに救はるべき必要を見出すやうになり、遂に救濟宗教が生れるに至つたのである。良心宗教が發生したのは、オルフキズムの感化である。オルフキアイズム以來、



ギリシヤでは、良心を説き、救済を考へるやうなつた。(拙著「精神運動と社會運動」二六六頁「希臘宗教推移の研究」中「オルフキズムの宗教改革」を参照、  
そして、其後、宗教は良心を中心として發達し、ソクラテス、プラトンを經て、ストアイク學派を生んだのであつた。

セミチック宗教は、始めから、良心の問題を重視した。モーセの十誡の如き、立派な宗教的律法である。それをイエスが、更に内觀的に深めて、説いたのが「山上の垂訓」である。マタイ傳五、六、七章は實に峻棘な自己批判である。ギリシヤのノスチクの救濟宗教がセミチックの此傳統に感化を與へ、それに内側から發酵した基督教の分子が結合したものが、パウロの宗教であつた。  
それで、パウロに於て、實に勝れた良心の發酵を見た譯なのである。

神の前に義とせらるゝは律法を聞く者にあらず、義とせらるゝは、律法を守る者なり、それ律法なきの異邦人、もし本性のまま、律法に載せたる所を守らば、律法なしと雖も己の律法たるなり。彼等其心に銘されたる律法のはたらきを表はし、其良心これが證をなして、其思念がひに或は貶め、あるひは褒むる

ことを偽せり、それ審判は我が福音に云へる如く神イエス・キリストをもて、人の隠微たる事を鞠かん日に成るべし(ロマ書二章十三—十六)

彼は、良心を此處に云つてゐるやうに、内側に見てゐる。又パウロは、「わが良心聖靈に感じて」(ロマ書九章一)と云つてゐるが、彼にとつて、聖靈は、決して外側に在るものでなくて、内觀の生命を掘り下げて、そこに湧き出で来る超越的なものであるであつた。そして、其危機々々に、神が示現することを彼は親しく經驗するものであつた。深く掘れば地下水に出會するのである。彼はそこで自我以上のものに觸れたのである。彼は——イエスは、か程迄に云はないが——良心を繰返し——云つてゐる。

怒に由りてのみ服はず、良心に由りて服ふべし(ロマ書十三章五)  
我等の良心……證す(コリント後書一章十二)  
かく我等主の畏るべきを知るが故に人に勤む、我等既に神に明らかに知られたり、亦汝等の良心にも明らかに知られたるならんと思ふ(コリント後書五章十一其他、コリント前書十章二十八、二十九)



最も喧しく「良心」を言ふてゐるのはテモテ前書である。(一章五、十九。三章九、四章二)

そこでは彼は自らを罪人の頭なる彼(テモテ前書一章十五)と呼んで居る

パウロは「善き良心」と云ふ。Good conscience! 英語で云ふならばいゝ響の言葉である。私どもも、覺醒してゐないと、知らず識らずの中に、時代にたぶらかされ、周圍の悪い感化を受けて、グッド・コンシエンスを失ふ恐れがある。昂奮状態になると殊に、此危険が多い。ストライキの場合など、よくそんなことがある。そして良心がなくなつて、案外な非行が行はれる。さう云ふ場合には、神が隠れて、何が何だか、薩張り譯が分らなくなるのである。そして、少しも、良心の生活が出来なくなるのである。其時に、——動搖の渦中に在つて——イエスのやうな方を凝視する事が出来ることは幸である。我々には是非共「信仰」と「善き良心」とを要するのである。今日、日本の或種の宗教信者の如きは、其熱烈な所から見れば、いゝ信仰を有つてゐるのかも知れぬが、然し、グッド・コンシエンスを有つてゐるとは

Conscience

云へないのである。世紀末のデカタン主義もさうである。彼等は、美を高唱し、耽溺を説き、官感の享樂を讚美するが、そこには、少しも、グッド・コンシエンスがない。其方面から見るとは全く駄目である。私どもの良心は烙かれてゐては何にもならぬ。(テモテ後書四章二)

良心に二通りある。即ち、可變性のものと、不變性のものとの二つである。良心は根元に於ては、二つの問題に係はる。それは即ち、(1)「生命」及び(2)「生命の成長」である。そして、道徳は、「生命」に關しては不變であり、「生命の成長」に關しては、可變である。然し、成長そのものの法則は、不變である。それで、此「生命」と其成長とを基礎にした時、良心は不變である。

此頃よく、道徳の可變性、不變性に就いて論議をする人があるのを聞く、そして或人は時代の變ると共に、道徳を破壊して行かねばならぬやうに考へるのである。然し、生命の本源から出る道徳は、わざ／＼破壊されぬし、又破壊され得るもので



もない。生命がグウツと、我々の内に、視き込のぞむ時、自づからに、我々の良心ははつきりと分るものであるから我々は、色々の論議ろんぎに惑まどはさるゝ事なくして良心の中に常に目醒めざめてゐるのでなくてはならぬ。

パウロは考へた、自分は良心を磨みがきすます程、身慄みぞるひする程恐ろしいのは、自分の缺點の多い人間にんげんである事であつた。威張かばりたいが、ヒいが入つてゐる。彼は、その恐ろしい自分のヒいに氣きがついた。それで彼は、「自分は罪人つみびとの首だ」としみるゝと感ずるのであつた。

これが、パウロのキリストを信じた理由りゆうである。こゝに彼の強味つよみと、弱味とがある。今日、多くの人々が贖罪とくざい宗教しんじゆうを信じないのである。それは、良心を重視ぢゆうししないからで、従つて内観ないくわんの分子は彼等には、充分知られないのである。わかる人には、「恵めぐみの主よ、私の傷所きずどころをどうか縫ぬふて下さい」と云ふ叫さけびが心の底から滲にじみ出る。

或人は、「罪罪つみづみつて、一體、罪なんか何だ、俺おれは發展はつてんさへしたらいいのだ」と云ふ

のである。然し、良心りやうしんの磨みがきすまされる時に其人は始めて自分の心の古傷ふるきづの慘狀さんじやうに氣付き贖罪とくざい宗教しんじゆうへと行くのである。そして、その古傷ふるきづの上に、神のあぶらの塗ぬられることを求めるのである。私は必ずしも、贖罪とくざいを實在じつざい的にとれとは云はぬ。然し、心理的に、これを探る。それは、傷所きずどころを、恵めぐみで癒いされたいと云ふ内なる人の切願きつげんに應ずる神の恵めぐみである。

自  
欺  
可  
ら  
欺  
く  
可  
ら  
ず

パウロは、従したがつていつも内省的ないせいてきであつた。そして自ら偽いつはりらなかつた、私は、自然主義しぜんしぎ文學ぶんがくにはあき足らぬが、嘘うそを云はぬ所だけは偉いと思ふ。岩野泡鳴いはのほうめい——其人は好きではないが——が、嘘うそを云はなかつた事だけは推賞すいじやうしてもいい。

兄弟よ、若しはからずも過に陥る者あらば、汝等のうち靈に感じたる者柔和なる心をもて之を規正すべし、亦自己をも顧みよ、恐らくは汝誘はるゝこと有らん(ガラテヤ書六章一)

誰も自ら欺く勿れ(コリント前書三章十八)

汝等自ら欺く勿れ(同六章九)



國木田獨歩のように「自ら欺らざるの記」を書ける人は偉い人である。人間の心の中には、闇黒の部分と共に、強い部分——光の部分がある。

自然主義文學は、虚偽を吐かぬか知らぬが、たゞ闇黒の方面のみを描寫して、これが人生の眞だと標榜するのである。私は、自分の小説を書いた時、單に、人間の弱點を寫すのみでなく、此分子——光の部分を書かねばならぬと考へた。パウロは神の恵を受けて、此強い方面をも隠さずに曝け出して書いたのである。それで、罪の懺悔のみではなくして、甦りの主が彼の原動力となつて、彼は、奮起して、力戦をした。そして、彼は、その事を告白して私は如斯く強いと云ふたのである。

我みづから省るに過あるを覺えず、然れども此に因りて義とせられず、我を審く者は主なり（コリント前書四章四）

所が、此神に由つて甦る人間の光の部分、餘りに抑へつけると、立つて戦ふ元氣をなくする。カルビニズムの弊のあるのは其點である。此に對して、十八世紀末

から、現代にかけての「自由の福音」——凡てのものが現在に完成すると力説したのは、メソヂスト主義者であつた。此爲に、基督教が、カルビニズム以上に倫理的に回復され、これに依つて、基督教が其後、ズウツと高まつた事は事實である。

ワードは、十九世紀の三大預言者として、トルストイと、カアライルとラスキンとを擧げてゐる。トルストイは、愛を説き、カアライルはシンセリチー（眞摯）と、辛辣な自己批判を教へ、ラスキンは、凡てのものは表現を採らねばならぬ事を示した。人を愛すると云つても、愛が自らの表現として、其人に對して經濟的の援助をも惜まないものでなければそれは愛ではない。表現の裡に魂が在るとラスキンは云つた。又、トルストイは、基督の愛に就いて、カアライルは「欺く勿れ」と云つて、獅子吼したのであつた。パウロ程、自分を欺かぬ人は珍らしい。我々は、自分手に自分を欺き易い。充分出来る力があつても、——自分を欺いて——ないやうに考へる。我々は此點を充分に警戒する必要がある。それは、自分の力を信じない事に因るも



のである。

カアライルの「英雄崇拜論」は是非誰もが一讀すべき名著であるが、それに依ると英雄は眞面目である。どんな場合でも非常に眞面目であると云ふのである。

ジョージ、フォックス（クエーカー宗祖）は、一生涯を通じて、自らを欺かぬ眞面目な人間であつた。それで、非常に強かつた。私どもの時代に、是非、此自ら欺かない人間が欲しいものである。パウロはかくの如く良心を批判して、内省的であつたから、其時代の罪がよく分つた。生命と、成長が刻む道より、側道へ外れて、良心が色々碎けてゐる有様が彼にはよく了知された。

罪	の
分	類

それでパウロには、罪の分類が多くある。レッキーの「歐洲道德史」を見ると、パウロの記載してゐるやうな罪惡の横行が、當時の羅馬の社會の實狀であつた事が知れるのである。

テニソンの詩の中に、テレマカスと云ふのがある。それは、ロマの人々が力闘者

——達の殺し合を見物してゐる時であつた。一方が敗けて倒されるのを見てそこへ來た基督教の僧であるテレマカスが、飛び込んで行つて「可哀さうだ」と云ふのを聞いて、ロマの人々が彼を刺し殺したといふ物語を書いたものでて。以て、當時の實情を推察することが出来る。

### 罪の分類

それ肉の行は顯著なり、即ち、苟合汚穢、好色、偶像に事ふること、巫術、仇恨、争鬪、妬忌、忿怒、分争、結黨、異端、娼妓、兇殺、醉酒、放蕩などの如し、此等の事につき我嘗つて、汝等に、斯る事、なす者は、神の國を嗣ぐべからずと告げしその如く、今また預じめ之を告ぐ（ガラテヤ書五章十九）

聖徒たるに符ふ如く奸淫及び凡ての汚穢れたること又食ることを互に言ふことだに爲す勿れ（エペソ書五章三）

汝等、義しからざる者の神の國を嗣ぐことを得ざるを知らざるか、汝等自ら欺く勿れ、凡て淫を行ひ又は偶像を拜み、または姦淫をなし、又は男娼となり、又は男色を行ひ、又は盜竊、または貪婪、または沈酒、または辱罵、または鞞索者などは皆神の國を嗣ぐことを得ざるなり、（コリント前書六章九—十）律法は義人の爲に設けたるものに非ず、不法なるもの、不敬なるもの、罪惡なるもの、不潔なるもの、邪僻なるもの、父を殺せるもの、母を殺せるもの、人を殺せるもの、奸淫を行ふもの、男



色を好むもの、人を擾むもの、謊言を云ふもの、偽誓ふ者、まだ此外、正理に悖ること有るが爲に設けたり(テモテ前書一章九—十)

其他ロマ書一章二十九、テモテ前書六章四—五、テモテ後書三章二—四

第二章 第一節の三「デカダン時代と祈」の項参照

改宗以前の羅馬期の道德——パウロ時代の社會状態の險惡なる雰圍氣は、到底今日の我々の想像も及ばぬものであつた事が、此罪の分類を研究すれば、少しは推察される。丁度それは、遊廓に於ては、普通の社會の道德と全く違つたものが行はれてゐるやうに、頽廢期に臨んでゐた、羅馬は、實に暗黒であつたのである。

パウロはさう云ふ時代の、眞中に、生命の内部から、此等の凡ての罪惡を償はんとする新らしい力が湧出するのを見たのであつた。



パウロは、今迄の道德の外に、神の自由の中に噴火する一つの力を經驗した。そして無理に、齒を噛みしめて、フン張つて律法をいや／＼乍ら守ると云ふのでなく喜んで道德を行ふ事を得たのであつた。

た。即ち、それは道德を本能化して行く道である。自分の内側から、油の如く、香水の噴水の如く、香の高い道德生活が自然とそこに溢れ出て來るのであつた。

聖靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、推節、かくの如き類を禁ずる律法あることなし(ガラテヤ書五章二十二—二十三)

然れば兄弟よ、我神のもろ／＼のあはれみをもて汝等に勸む、その身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして、神に献げよ。これなすべきの祭なり(ロマ書十二章一—二十一迄)

パウロは、道德を極めて、自由なものと見た。それは勿體ぶつて、厭々乍ら行ふものではなくつて、神のあはれみに因つて喜んで行へるものであつた。即ち、彼に於ては道德は本能化されたものであつた。道德そのものを神に對する一つの祭であると見た。喜んで神へ献げるお祭であるとした。

ジョン・ラスキンは、「建築の七つの燈」の中に、次のやうな事を述べてゐる。即ち、建築は、人間の良心の上に建てらるゝ所のものである。良心と愛と人格とが表現を採る時に、世界で尤も立派な建築が出來上る。だから、良心の無い所には、眞個の



建築は存在しない。神の前に七つの燈明があがる、真理、美、力、犠牲、従順、生命、記憶の七つの精神的作用が、建築の凡てに現はれて居るものであると、ラスキンは、詳しく論じてゐる。丁度それと同じく、禮儀といふものも一つの表現である。そして、新しい精神は常に新らしい、表現を要するのである。生命が更新される時其れは必ず新らしい表現を伴ふものである。パウロが、ロマ書十二章に記してゐるのは新らしいイエスの宗教の上に立つ新道徳である。

……愛は偽はること勿れ、惡は憎み善は親しみ、兄弟の愛をもて互に愛し、禮儀をもて相譲り、勤めて惰らず、心を熱くして主に事へ、望みて喜び、患難に耐へ、祈禱を恒にし、聖徒の匱乏を賑恤し、遠人を慰勲にせよ、汝等を害ふ者を祝し、之を祝して誼ふべからず、喜ぶ者と共に喜び、哀しむ者と共に哀しむべし。相互に意を同うじ、尊大志をなさず、反つて卑微に附けよ。又自己を智しとする勿れ、惡をもて惡に報ゆる勿れ、衆人の善とする所に記めて之をなし、行し得べき所は、力を竭して人々と睦み親しむべし。わが愛する者よ、其仇を報ゆる勿れ、退きて主の怒を待て、そは録して、主の曰ひ給ひけるは、仇を復すは我に在り、われ必ず之を報いんとあればなり。是故に汝の仇もし飢ゑなば之に食はせ、若し渴かば之に飲ませよ、汝如此するは、熱炭を彼の首に積むなり、なんち惡に勝たるゝ勿れ

善をもて惡に勝つべし(ロマ書十二章九—二十一)

イエスの譬話の中に、ある王が大宴會を開いた。そして多くの人を招待した。所が、來會者の一人が禮服を付けて來なかつた。それで、其人は外の暗黒へは追ひ出されたといふのがある。これは一寸コンベンショナルに見えるが、然し、さうではない、いつの場合でも、禮儀——それは道徳の藝術的方面である——を要するのである。

殊に今日の、女の人たちには、まだ新らしい表現を有たぬ人が多い。男子にも女子にも、新しい精神に對應する新しい表現が要る。日本に生命の表現としての禮儀がない。道徳は、我々にとつて、新らしい表現——内側から湧いて來る所の——を採るものでなくてはならない。



### 第三節 彼の感情の解剖

彼の
涙の
と
憂

イエス・キリストも泣いた。殊に多情多感なパウロは、何遍も永く泣いた。彼は『三年の間涙を流した』と云つてゐる。三年間の涙！日本人は一生涯の間に三遍しか泣かないと云つた人がある。即ち、生れた時と、死ぬる時と。親に死に別れる時としか泣かないと。パウロは一生懸命であつた。だから泣いた、泣くことは少しも構はない事である。

#### 三年間の涙

此故に汝等、儆醒せよ、我れ三年の間夜も晝も断えず涙を流して各人を勧めしことを憶べし（使徒二十章三十一）

#### 多への涙

われ大なる患難と心の哀痛あるにより多くの涙を以て汝等に書き遣れり、此は汝等をして、憂へしめんとするに非ず、我汝等を受する事の深きを知らしめん爲なり（コリント後書二章十四）

#### 今また涙を流して

蓋われ屢々汝等に告げ今また涙を流して汝等に告ぐる如くキリストの十字架に敵して行ふ者多ければなり（ピリピ書三章十入）

彼はエペソで三年間夜晝涙を流して福音を傳へ、コリント教會の人々の現狀に對して心を痛めて、多くの涙を流し、又十字架敵對者が多いので、「涙を流して」ピリピの信者を警醒するのであつた。

パウロは、苦勞性であつた。それで絶えず心配をしつゝけてゐた。然し彼の憂は株式や投機や、恐慌を憂ふるのでなくて、神の憂であつた。今日の人には「世の憂は多いが、パウロのやうな大きな憂が少ない。

大なる憂と耐えざる痛み（ロマ書九章二）

【憂の章】……（コリント後書第二章）

【世の憂」と「神の憂との區別」

今我が喜ぶは、汝等を受へしめしに因るに非ず、汝等は憂へて悔改むることをせしに因りてなり。汝等神に循ひて憂うるに因り我等に少しも損はるゝ事なし。それ神に循ふ憂は、悔なきの救を得るの悔



改に至らしむ。然れど世の憂は死に至らしむるなり。汝等が、神に循ひて憂へし所の事を視よ。汝等に如何なる勉勵、をた自訴、また忿恚、また畏懼、また戀慕、また熱心、また罪を責むる心をせしや、一切汝等彼事に於て自ら潔き事を表はせり(コリント後書七章九—十二)

彼の苦痛の喜

パウロは始めから苦痛を覺悟して基督信者になつた。彼の苦痛は普通の苦痛とは少し違つた所があつた。私はパウロの苦痛の考へ方が好きである。彼の苦しみは、世界の神と共に苦しむと云ふやうな非常に大きな苦痛であつた。

苦痛の使徒

彼は我名の爲に如何ばかりの苦難を受くるか我これを彼に示さん(使徒九章十六)  
苦痛の性質

われ意ふに今の時の苦しみは我等に顯はれん榮に比ぶべきに非ず、ロマ書八章十八)  
それ我等が受くる暫くの輕き苦しみは、極めて大なる窮なき重き榮を我等に得しむるなり(コリント後書四章十七)

我等もし子たらば又後嗣たらん則ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり、我等もし汝と偕に

苦を受けなば、彼と偕に榮をも受くべし(ロマ書八章十七)

そはキリストの苦しみ、我等に多くあるが如く我等の安慰もキリストに由りて多くあればなり、我等或は患難を受くるも、汝等が安慰と救の爲なり、此安慰と救は、汝等の中に働きて我等が受くる如き苦しみを汝等にも同じく忍ばしむるなり。我等あるひは安慰を受くるも、亦汝等が安慰と救の爲なり。汝等が苦しみを偕に受くる如くまた安慰をも受くることを我等は知る。此故に汝等につき我等が望む所は堅し(コリント前書一章五—七)

彼は先づ苦しみを通過して、次に、榮光のキリストを見ることを期待した。彼はキリストと偕に苦痛を受くる事に因つて、キリストと偕に神の後嗣となることを望んだのであつた。

苦病の賜物

そは汝等に賜ふ所の恩恵は、キリストの爲に、たゞ之を信ずることのみならず、亦これが爲に苦しみを受くることを賜ひたればなり(ピリピ書一章二十九)

苦の參與者

また彼、其復生の能力を知り、その死の狀に循ひて彼の苦しみに與かり、兎にも角にも、死にたる者の甦ることを得んがためなり(ピリピ書三章十、十一)



憂うるに似たれども常に喜び、貧しきに似たれども、多くの人を富まし、何も有たざるに似たれども、凡ての物を有てり（コリント後書六章十）

我等が受くる凡ての患難の中にも我に慰め満ち悦び餘りあり（同七章一四）

パウロは神からの一つのギフト——頂戴物として、苦痛を考へた。

キリストの苦しみに參與することを彼はそれで、喜びとした。彼は世界を救はんとする大なるキリストの苦痛の努力の御裾分けをしていただくのだと云つてゐる。

苦痛は見方に依つてはいつでも考へられる。私は「苦痛の哲學」の中に、此事に就いて詳論をしてゐるが、我々に苦痛神經のある事は、人間が高尚な生物であるし、しである。

（拙著「人間苦と人間建築」中「苦痛の哲學」参照）

下等動物になる程、苦痛感は減少する。これは、ロエブなどが研究した所である。再生力のないもの——例へば神經節の如きもの——は、特別に痛覺が鋭敏である。

神は特別に、人間に苦痛神經を賜はつたのである。即ちフワブリカス・レムニカスと云ふ特別な神經節がある。

涙には涙の使命がある。涙の出る原因については色々の説がある。(1)泣くから、(2)悲しいから、(3)表情の目的で泣くのだと云ふ人もある。いづれにしても、涙が一個の使命を有つてゐることは否定することが出来ない。泣くと充血する、そして目がうるむ其時、涙は氷囊の代用となつて、充血を冷ますのである。ゼームスは、悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだと云ふのである。左程悲しいのでなくつても、それを表現すること、——例へば泣き出すと——本當に悲しいやうになる。預言者エレミヤは「涙を流すやうに神様がつくつたのは怪しからぬ」と云つてゐるが若し人間に、涙がなかつたら、大變である。涙は悲哀の救濟者である。パウロは苦痛を知り、悲哀を知り、又涙に幾度か浸つたのであつた。それで彼は、苦痛其自身の裡に、恵がたつぷり秘められてゐる事を見出した。



『憂うるに似たれども、常に喜んで』ゐるのが彼であつた。凡ての患難の中にも悦びが餘りあることを彼は充分知つたのであつた。高山樗牛は「悲哀の快感」を説いてゐるが、確に、悲哀の裡には一つの喜がある。信仰の初期に於ては、誰しも、凡てが悲しく感じるものであるが、段々眞の信仰に徹底して來ると、悲哀の世界に生れ出る事が、一つの恵であることが分るやうになる。折々は、少し位、悲しい事があつてほしい氣がするのである。單調を破るために時々悲哀があつても差支へがないが、それは丁度、時々夫婦の間に行き違ひがあることが、一層相互の愛を増すやうなものである。わざ／＼木戸錢を拂つて、芝居を見に行かなくとも、神様は、大きな芝居を——悲哀な世界の大きなドラマを無料で見物させて下さる。舊約聖書にある「ヨブ記」の終章は、一寸もヨブの苦痛を慰めるものでなくて、たゞ、疑問ばかりが並べてある。ヨブは、神に因つて、苦痛を通じて、表はるゝ一つのメロドラマを見せられたのであつた。そして、凡てが、大きな攝理の中に動いてゐる事を知らせら

れて遂に萬事を神に託せることが彼に出來て、始めて、彼はその苦惱の解決を見たのであつた。

我々は、どんな苦痛をも、戯曲化する工夫を知る者とならなくてはならぬ。そして此大きな實在の戯曲、——宇宙生命の大きなドラマを無代で見せて下さることを「ありがたう、神さま！」と感謝するのではなくてはならぬ。

私は小さい時から、悲しい生活をくゞつて來た。それで、苦しみと悲しみとに對してはいつでも通り札を持つてゐるのである。

パウロを見よ！彼に依つて、苦痛は完全に價値の顛倒を見た。「十字架」の秘義を彼は茲に發見したのであつた。

やがて舞臺が廻る。すると、悲哀の世界は隠れて、凡てが喜となる。パウロは、「喜の書翰」ピリピ書を書いてゐる。然も、それは獄内で認められたものであるが、ピリピ書は、始から終まで、喜びで充ち満ちてゐる。



また恆に汝等凡ての爲に願ふ毎に欣びて求ふ……執れにもあれ、或は偽、或は誠どもに宜る所はキリストなれば、我これを喜ぶ、且常に喜ばん。……信仰より出づる喜びを得しむるに至らんことを知る。われ再び汝等と共に居らば、汝等の喜び我に因りてイエス、キリストの中に益々大いならん（ピリピ書一章五、十八、二十五、二十六）

我喜びを満たしめよ……キリストの日の爲に我をして我が行ひしところ勞苦せし所のこの徒然ならざるを喜ばしめよ、汝等の信仰も供物として獻げんには、假ひ我が血を流して濯ぐとも我これを喜ばん、汝等、凡ての人と共に喜ばん、汝等も之が爲に喜べ我と共に喜べ、……是故に我いよく速かに彼を遣はさん、これ汝等をして再び彼（エバフロデト）を見て喜ばしめ且我愛を減さんが爲なり、然れば汝等主により喜びて彼を迎へかつ此の如き人を尊ぶべし（ピリピ書二章十六―十八、二十八―二十九）

終に我これを云はん、我が兄弟よ、汝等主に在りて喜べ……是故に我が愛するところ、慕ふところの兄弟われの喜、わその冠たる我が愛する者よ、汝等常に主に在りて喜べ、我また云ふ、汝等喜ぶべし……我汝等が我を思ふ心の今また漸く崩し、を主に因りて甚だ喜べり、（ピリピ書三章一、四章一、四、十）十二回「喜び」について記してある。

パウロは「汝等常に喜べ」と云つてゐる。基督教は、喜ぶ所の者である。或人はたゞ十字架のキリストのみしか知らない。そして甦のキリストを少しも知らぬので

ある。然し、我々は、甦のうちに、大なる喜のあることを知らねばならぬ。イエスの宗教は、諸行無常の鐘の聲ではない。人生の果敢なさを告げる哀音ではない。天空に打ち響くイースターの鐘である。ユウアンゲリオン！それは大なる喜びの音づれである。それであるから、いつでも喜びの裡にあるのが、本當のキリスト信者である。

彼の怒

パウロは猛烈に怒つた。殊にコリント教會の信者達に送つた手紙には、實に猛烈な口調の注意が記されてゐる。彼は熱心に人のことを思ふたから、怒る時には眞剣に怒つた。

如此あらば我等が誣らるゝ如く善を來らせんとて惡をなすは宜しからずや、此を我等が言葉と云へる者あり斯る人の罪せらるべきは宜なり（ロマ書三章八）

彼は、こんな誣言を言ひふらす人間は罰せられたらいいと云ふのである。  
罰せらるる敵

我等の主イエス・キリストの名によりて汝等の集らんとき我等の主イエス・キリストの能により、かくの如き者をサタンに交し、其肉體を滅し其靈をして主イエスの日に救を得しめんと定めたるなり（コリン



我さきに汝等に告げたり、我第二次汝等に遭ひしとき語りし如く罪を犯し、者と其餘の人々に今また豫じめ離れ居りて告ぐ、我、復いたらば必ず怒さじ(コリント後書十三章二)

パウロは若しも、彼の行かぬ前に、コリントの信者が改心しないと彼が行つた時罰してやると書遣つたのであつた。

彼の意志堅——「彼の答」

然れど主の心に適はず我速かに汝等に至り誇る者の其言葉に非ず、其能を知らんとす……汝等何を願ふや、答を以て我汝等に至ることを願ふ乎、はた愛と柔和の心を以て至ることを願ふ乎(コリント前書十九、二十一)

我、汝等が全く服はんとし諸ての違逆者を罰せんと既に其例をなせり(コリント後書十章六)

こんな點から見れば、彼が強い人間であつたことが知れる。

彼は終末の時代に、凡ての不義に向つて神が怒を注ぎかけると考へた。それは民衆のことを、熱心に思ふたからであつた。

彼の神の怒の觀念 (ロマ書一章二)

それ神の怒は不義をもて眞理を抑ふる人々の凡ての不虔、不義に向ひて天より顯はる……(ロマ書一章十八)

研	心	彼
究	の	の
	熱	熱

パウロは非常に熱のある人間であつた。彼は神の如き熱心を有つてゐた。ラスキンは、人を愛するのに特別な要素を擧げてゐるがその中に熱心と云ふ一つの條件がある。今日は凡てが器械化した時代であつて、熱心が薄い。トーマス・エヂソンは、三十五年前に、電球の製造に熱中して、一週間飲まず、食はずで晝夜研究に従事した事があつたと云ふ。私どもにも如斯熱心がなくてはならぬ。

愛の要求

我かく言ふは汝等に命ずるに非ず、然れども他の人勵むによりてなり。且汝等の愛の實を試みんためなり。(コリント後書八章八)

不斷の熱心

然れども唯我が汝等と偕なる時のみならず、善事の爲に常に熱心なるは宜しきなり。(ガラテヤ書四章十八)



神の熱心の如き熱心

我れ神の熱心の如き熱心をもて汝等を念ふ、我、汝等を一人の夫に聘定せり、これ汝等を潔き女としてキリストに献げんとするなり(コリント前書十一章二)  
我れ書を汝等に送りしは、……汝等の爲に有つ所の熱心を神の前にて汝等に表はさんことを思ひてなり(コリント後書七章十三)

我等もし心狂へるならばこれ神の爲なり、心慥ならばこれ汝等の爲なり(コリント後書五章十二)  
わが如此云ふは狂へる者の知し(コリント後書十一章二十三)

彼等が汝等に熱心なるは善意に非ず汝等を己に熱心ならしめんとて汝等も離れしめんとするなり(ガラテヤ書四章十七)

彼等が神に熱心なるは我證す、されども其熱心は知識に由るに非ず(ロマ書十章二)  
白熱の信仰の要求

たゞその(テストの)至るに因りてのみならず、汝等の慕ふところ、又憂うるところ、又我に向ふ汝等の熱心を我に告ぐるとき、彼が自ら安慰を得たる其安慰を以て我等を慰め給へり是故に我ます／＼喜べり(コリント後書七章七、其他、同書七章十一、八章十六、二十三)  
服従の要求

我さきに書を遣り」は汝等が凡ての事に順ふや否、こゝろみて之を知らん爲なり(コリント後書二章九)  
感情の急轉 (コリント前書一章二十五)

パウロは哲學的の議論をして居るかと思ふと急激的な言葉を用ゐる。ロマ書一章二十五節の如きがその好適例である。その他エペソ書三章十六節——二十一節を見ると之がよくわかる。今迄は議論して居ても急に祈に變つて行くところが如何にも熱情の人であることがわかるのである。

彼の至誠・煩悶・賞讃

パウロはユダヤ教であつた時も、イエスの弟子になつた後も、其一生を通じて、至誠を以て一貫してゐる。どんな場合にも嘘を吐かなかつた。

我キリストに屬ける者なれば我が言は眞にして偽なし(ロマ書九章一)  
我等の良心われら神の賜ふ所の丹心と信實に由り、また肉の智慧に由らず神の恩寵により世に在りて行をなし、特に汝等に向ひて此の如き行を爲せりと證す、是れわれらが誇る所なり(コリント後書一章十二)



我等多くの人の如く神の言葉を混亂せず、即誠により神に由りて神の前にキリストに在りて言ふなり  
(コリント後書二章十七)

人を惑はす者に似たれども眞實………(コリント後書六章九)

われ汝等の事を彼に誇りしかど之を愧とせず、我等が汝等に語りし言葉のみな眞實なりし如くテトスの前に誇りし言葉も亦眞實なり(コリント後書七章十四)

或人は疑惑することを何か豪いことのやうに考へるのである。然しそれは智識に就いてである。私達は知つてゐる事よりも知らぬことの方が幾倍あるか知れないのだから、哲學上の煩悶はいゝ、然し、宗教に就いては少しも疑惑を要しないのである。それは生命には——俺は生きてゐるか、死んでゐるか不明だなど云うことは無いのだから——疑惑は無い。あなたそれ自身が死んでゐる——とどれ程、主張しやうとも、あなた自身は現に生きてゐるのである。神は——生命である、「私が在るのは」神があるからである。それは、「我」と「生命」の裡には神の絶対性が籠つてゐるからである。それで、智識と哲學とはどれ程疑惑の的にしてもいゝけれども、生命

に對しては寸毫の疑をも挟まずして信じなくてはならない。眞の宗教とは——生命に對する——實在に對する信仰である。生命それ自身が、錯誤せるものを今一度引返すといふこと、これが宗教である。煩悶してもいゝのは、智識の方法論についてのみである。

噫われ困苦人なる哉、此死の體より我を救はんものは誰ぞや(ロマ書七章二十四)  
萬の受造者は今に至るまで共に歡び、共に苦しむことあるを我等は知る(ロマ書八章二十二)

今日の宗教はどちらも人を賞めない。何かと云へば人を撃つのである。所がパウロはどうであつたか？ 彼は、瀕つて人を賞めた。

彼等わが心と汝等の心の慰めなり、此故に汝等かくの如き者を重んずべし(コリント前書十六章十八)  
然ば汝等主により喜びて彼を迎へ此の如き人を尊ぶべし(ピリピ書二章二十九)

ピリピの教會にエバフロデトと云う立派な人がゐた。パウロは此人に就いて——死んだからでなく——生きてゐる時に「此の如き人を尊ぶべし」と云つた。新しき時代の宗教は人間の尊嚴から始まる。パウロは此の尊嚴に對する讚美を常に持つて



いた。此處にパウロの新し味がある。

#### 第四節 愛に就ての彼の徹底

愛の人  
パウロ

パウロは生得的に人を愛する性情を持つてゐたらしい。パウロの知人として百數十人を數へ擧げる事が出来る。有名なコリント前書十三章以外に私は、彼が個人々々に對して深甚な興味を有つてゐた證をいくつでも擧げる事が出来る。私はいつも、羅馬書は逆倒的に讀む方が興味があるとしてよく人に勧めるのであるが、私は殊に羅馬書の第十六章が好きである。其處には彼の個々人に對する温かい心持がさながらに打出されてゐるからである。

我ケンクレアにある教會の執事なる我等の姉妹フィベを汝等に薦む。汝等、聖徒の爲すべき如く主に緣りて彼を納け、其需る所は之を助けよ、彼は素、おほくの人を助け、また我をも助け、請ふブリスキラとアクラに安きを問へ、彼等はイエス・キリストに屬いて我と共に勤むる者なり。又我が命の爲に己の頸を劍の下に置けり、唯我のみならず、異邦人の凡ての教會もまた彼等に感謝せり、又その家にある教會

にも安きを問へ、また我が愛する所のエバイネトに安きを問へ、彼はアジアに於てキリストの初に結べる實なり、我等の爲に多くの苦勞をせしマリヤに安きを問へ、また我と共に囚人となりし我が親戚なるアンデロニコとジュニヤに安きを問へ、彼等は使徒等の中に名聲ある者なり、我に先立ちてキリストに居りし者なり(ロマ書十六章一—七)

其他「キリストに在りて、我が愛するアンピリアト」キリストに屬いて我等と共に勤るウルバノ、「我が愛するスタク」キリストに於いて鍛鍊なるアペレ「アリストプロの家の者」「我が親戚なるヘロデオナ」「ナルキツの家なる主に居る者」「主に於て、苦勞せし女なるテルバイナ、テルボサ」愛せらるゝペルシー……彼女は、主に居りて多く苦勞せし女なり」「主に選ばれしルポと其母——彼が母は即ち我母なり」……アスキキリト、ピリゴン、ヘレマ、バトロバ、ヘレナ及び彼等と偕にある兄弟、ピロロコ、ジュリヤ、ネリオと其姉妹、オルンバ及び彼等と偕なる凡ての聖徒——多くの人を助け又パウロの助け人であるフィベの如き婦人に對し、パウロの一團のために多くの苦勞せし、女性のマリア等、一人一人に就いてパウロは美しい追



憶をしてゐる。殊に、ルポに對しては、「君のお母さんはまた私のお母さんだよ、大事にして呉れよ」と云つてゐる。如斯くパウロは、女に對し、男に對し、細やかな愛情を一杯に曝け出してゐる。

パウロには殊にテモテを愛した。テモテに對するパウロの愛情は、想像も付かぬ程の愛であつた。それは、テモテ前後書の中に實に香ひこぼるゝ程に盛られてゐる。パウロの愛に關する根本的原理は——「我いよく汝等を愛すれば愈汝等に愛せられず、然れど欣びて汝等の靈魂の爲に財を費やし身を盡すべし」(コリント後書十二章十五)と云う彼の言葉の裡によく表はれてゐる。彼はまた「我いよく愛すれば——いよく愛せられず」「汝等を愛せざるによるか」と云つてゐる。(コリント後書十二章十五同十一章十二)パウロは熱愛の人であつた。それで彼は狭く深く愛することが出来たのである。彼が奴隷オネシモの逃亡に際してビレモンに送つたビレモン書などを讀むと實に有難い氣がする。彼は實に熱愛の人であつたのだ。

### 愛 國

パウロは超國家的な人類愛を有つと共に特にユダヤ人を愛した。その愛は、「我骨肉の爲には、キリストから離れてもいと云ふ程度の切愛であつた。之は萩生徂萊の言葉——「若し孔子が日本へ攻めて來たら切り殺せ」と云つた——に酷似した言葉である。それ程パウロは、國民愛に於ても徹底してゐた。

若し我の弟、我骨肉の爲にならんに或はキリストより離れ沈淪に至らんも亦我顧なり(ロマ書九章三)

### 愛の神 と愛の 報 酬

パウロには神の愛を考へるにしても實に徹底的であつた。キリストすら、人類に下さる神は、其景品として萬物を下さるだらう——さう云ふ絶愛の神に對しては、「患難も困苦も、迫害も、飢餓も、裸體も、危険も、刀劍も——死も」何者も我等と神とを隔離する障害とはならない。我等は反つて、我等を愛する者に由つて、凡て此等の事に勝得て餘りがあるのだ」と云つてゐる。(ロマ書八章三十二—三九、五章五一—八)



博 愛

パウロは又『貧民の友で』あつた。パウロの使命は勿論十字架福音の宣傳にあつた。然し彼は、貧しき者を見遣さなかつた。彼は貧民の傳道と救済に盡力した。

彼等(柱)と思はるゝヤコブ、ケバ、ヨハネの唯願ふ所は我等が貧民を眷顧んことなり、我等もまた此事は素より進んで爲さんとする所なり(ガラテヤ書二章十)

今われ聖徒を助けん爲にエルサレムに往かんとす、マケドニヤとアカヤの人々、エルサレムの貧しき聖徒の爲に供給をすることを喜悦とせり(ロマ書十五章二十五、二十六、コリント後書九章一)

又コリント前書十六章一以下には、慈善救済費の支出に就いて親切な注意をしてゐる。

従つて彼は充分に愛の内容と其定義を知つてゐた。徹底した愛の人パウロの愛に就いて研究は容易に盡せない。

愛についての彼の所説は、それだけで、一つの研究をしなくてはならぬ位であつて、彼は愛を定義して、愛は一切の律法を完成するものだとしてゐる。

愛の定義

「それ己の如く汝の隣人を愛すべし」と曰へる此一言、すべての律法を全うするなり(ガラテヤ書五章十四)

誠命の主意は愛なり(テモテ前書一章五)

彼はまた、愛を綿密に解剖して、愛の性質愛の内容の何であるかを詳述してゐる。

愛の解剖

我愛する者よ、其仇を報ゆる勿れ……(ロマ書十二章十九以下)

人を愛する者は律法の完成者(ロマ書十三章八)コリント前書十三章全體

愛の本質

ヘンリー・ドラモンドは、コリント前書十三章を、『世界最大の』として研究した。これ程、美はしく、これ程、深く突込んで愛の本質を分析したものは、他に其例あるを私は知らぬ。

コリント前書十三章の——『愛の詩』は三つの部分から成つてゐる。

序論 一——三節



雄辨 謙言 知慧 信仰 慈善 犧牲

此凡てのもの愛を離れては意味なし

本論 四—十節

- 1 忍耐
- 2 利他
- 3 不妬
- 4 不誇
- 5 非證不行
- 6 自利不求
- 7 輕々不怒
- 8 不思議

愛の本質  
包忍信望  
容ぶずむ

- 9 不義を喜ばず
- 10 眞理を愛す

結論 十一—十三節

愛は成長する

パウロはまた愛の位置、愛には努力を要すること、及び愛の極性を説いてゐる。  
愛の位置及び極性

このもろくの事の外に愛を加へよ、愛は來ての徳の帯なり(コロサイ書三章十四)  
汝等愛を追ひ求めよ(コリント前書十四章二)  
積極性—

汝等、互に愛を負ふの外、凡ての事を人に負ふこと勿れ、そは人を愛する者は律法を完全すればなり、それ「姦淫する勿れ、殺す勿れ、盜む勿れ、妄の證を立つる勿れ、食る勿れ」と云へる、此外、猶、誠あるとも「己れの如く汝の隣を愛すべし」と云へる言葉の中に籠りたり、愛は隣を害はず、此故に愛は律法を完うす(ロマ書十三章八—十)



パウロは、たゞ一つだけしてもいい、借金があると云ふ。それは『愛の負債』である。その他の負債は一切人に負ふていけないと云つてゐる。

### 第五節 詩人としての彼

優秀なる  
宗教的  
散文詩

『キリストの言葉をして豊かに汝らの衷に住まはしめ、凡ての智慧によりて詩と、歌(讚美)と、靈の譜(歌)とをもて、互に教へ、互に訓誡し、恩恵に感じて、心のうちに神を讚美せよ。』(コロサイ書二章十

六) とパウロは云ふ。詩と歌と譜とを以て神を讚美する——これは基督教にとつては、唯一つしかかなひ藝術である。プロテストタント基督教は、偶像宗教に墮しやす  
い凡ての他の空間藝術を排斥して、時間の上に發展する——尤も非空間的、非偶像的——詩と音楽とを重視して來た。基督教會の教會音楽と云ふものが、もつともつと盛んにならなくてはいけないと思ふ。そしてイエスの弟子が、もう少し詩を

作る者とならなくては嘘だと思ふ。

パウロは、どれだけ詩人であつたか……を見たい。彼は、イエスに比べるならば、ズツと詩人的素質が落ちる。イエス・キリストは本然的の詩人であつた。マタイ傳を一寸開いて見ても、優秀な譬喩が、五十、六十と出てゐる。パウロは、かゝる點に於ては、お話にならぬ位拙いと云つていい。

けれどもパウロが、所謂散文詩體に書いたものは、實に立派なものである。心持のいい程、それは、リズムック(律動的)に書かれてゐる、で、私は、矢張、パウロの裡に、並々ならぬ詩人的天分があつたことを見出すのである。

彼は議論してゐても感嘆詞を絶叫する、彼は優れたる宗教的散文詩人である。パウロの散文詩の代表的なものとして、次の如きを擧げることが出來やう。

#### 煩悶の詩

ロマ書七章二十一—二十五

#### 憧憬の詩

ロマ書八章十四—三十九



愛の詩

コリント前書十三章

復活の詩

コリント前書十五章五——五七

幕屋の歎き

コリント後書四章六、五章四

此等の詩を、ギリシヤ語の原文で讀むならば、韻律がよく分る、散文詩として傑作であることが頷かれる。

日本語の翻譯でも、多少、原文の傳を傳えてゐないでもない。詩として讀む上から云ふと改譯の方は、言葉を、餘りに切りつめ過ぎたのと、韻律を傳へてゐぬ點が舊譯に對照して見て、少し拙い。詩としては、詩形が崩され、語勢が弱められてゐる。だから舊譯のものの方がズツといい。

試みにコリント前書十五章五十一——五十七節を朗讀してみる。

視よ 我 汝等に奥義を告げん  
我等 ことごとく寝るには非ず  
我等 みな木の葉のならんとき

怒ち 瞬く間に化せん  
そは 葉ならんとき 死にし人 甦りて  
朽ちず 我等も また 化すべければなり  
この朽つる朽ちざる者を着 この死ぬる者死なざる者を着んとき  
聖書に録して「死は勝に吞まれん」とあるに應ふべし

死よ 汝の刺は いづくに在るや  
陰府よ 汝の勝は いづくに在るや

死の刺は 罪なり  
罪の力は 律法なり  
我等をして 我主イエス・キリストに由りて勝を得しむる神に謝す

これが散文詩でなくて、何であらう。「幕屋の歎き」も、朗讀してみても、いかにも、感じがよい。

日本の翻譯文の典型と云つていゝ程、よく出来てゐる。(舊約の詩篇などは、殊に



翻譯文學として實に優秀な作品である。）

彼の譬喩の研究

散文詩としては、パウロのものには類ひ稀な雄篇があるが、譬喩の方面は、極めて、粗雑であつて、餘程、粗雑な感じがする。殊にイエスの譬喩に對照して此感が深い。序乍ら云へば、四福音書を通じて、イエスの喩譬が八十四種あるが、それは彼の心理的推移——メシヤの自覺の進行と共に、ほゞ三期を劃して變化して行つてゐる。スチーブンスとバートンのイエス傳の配列が、餘り間違つたものでないとすると、イエスの譬喩の初期のものは自然的な、成長する神の國の譬喩（マコ傳四章、マタイ傳十三章等）が多く、ペレア（ヨルダン川の東）附近で語られたものには人格的で人情味の籠つたもの（ヘルカ傳十五章、十六章等）が見られ、其生涯の末期に屬するものは、再轉して、王者的——王と云ひ、權威と云ひ、壯嚴な神の國の審判を表白したものが多くて、何だか恐ろしい氣がする。全體を通じて、イエスの譬喩は、實に立派なものであつて、深く人

情の深底に突込だものが多い。

パウロの譬喩を列擧すれば次の如くである。

- 大なる家……テモテ後書二章二十、コリント前書三章十一十七
- 陶人と神……ロマ書九章二十一
- 接木の野橄欖……ロマ書十一章十七—二十四
- 四肢と體……ロマ書十二章四、コリント前書十二章十二—二十三
- 衣……ロマ書十三章十四、コリント前書十五章五十三
- 芝居……コリント前書四章九
- パン種……コリント前書五章六—八、ガラテヤ書五章九
- 競馬場……コリント前書九章二十四
- 幕屋……コリント後書五章一
- 武器……エペソ書六章十



パウロの生きて居た當時、ギリシヤの都市に、ロジシアン（論理學者）グラマテリアン（文典學者）レトリシアン（修辭學者）の諸分派が各種の文藝を教授したり、創作したりして人人に持て囃されてゐた。パウロは之等の文學者思想家の間に伍して決してひけを取らなかつた。彼の衷なる人の批判は、確かに類例のない程、冴えたものである。彼の涙、彼の憂、彼の苦痛、彼の煩悶、彼の喜び、彼の怒が、彼の手紙の中にその儘に、露出されてゐる。私は、『内觀のパウロ』を研究してみても、今更の如く彼が其時代に於て、群を抜きんでた優越な個性であつたことを思ふ者である。

#### 第四章 論理・非論理・超論理



第一節 彼の論理の方式

第二節 彼の哲學的教養

第三節 彼の思想の系統

第四節 ミステリーの研究

第五節 彼の思想の變化

第一節 彼の論理の方式

論	欲
理	求

私は、進んで、パウロの哲學的教養の部分——彼の神學と、教條の内容——を本章に於て、研究したい。パウロは、ドグマ（教條）の人であると云はれる。それに間違ひはない。彼は自分の考へた事を、キリストに押しつけてしまふ。彼はイエス・キリストの傳記については、何等の記載も、説明もしてゐない。彼は、唯、キリストの救であるとか、贖罪であるとか極めて抽象的なものを取扱つてゐる。それで、パウロについては近代人は餘り尊敬を拂はない。「パウロは偏倚した思想家であつて、「教條の人」に過ぎない。我々近代人の生活とは何の交渉もない」として、近代の人人が、譯も無く、彼を輕視するのも全然無理で無い事も無いと思ふ。私は此部分、彼の非論理、超論理の部分——即ち、普通の論理の法則を外れてゐる部分——を特に解明してみたい。そして果し



て、彼の哲學と云ふものが左程まで、今日の我々の思想及び生活に對して、無意義無價値なものであるかどうかを充分検討して見たいのである。

普通の論理——理屈と云ふものには一定の形式があつて、所謂論理學がそれを取扱ふのである。それには、演繹の方式と、歸納の方式とがある。前者は、ある大なる絶對的事實があつて、それに關聯して、今一つの事實を、其うちから擷み出して來る。つまりある一つの事實を因として、それから、他の新らし推斷を引出して來る。それで演繹法と呼ばれてゐる。後者は、歸納法と稱するものであつて、時間的に色々な經驗をする。そして様々な新事實が刻まれる。そして、一定の程度迄の經驗の傾向——角度から、それより先の事件の傾き——「度」を測量するのである。そして、それから先の法則を割出すのである。三段論法と云ふのは、此法式に従つて、推理の歩を進めるものであるに過ぎない。『凡ての人は死ぬ、イエス・キリストは人である。故にイエス・キリストは死ぬ』と云ふのが、其論法の一例である。所で、イエス・

キリストだけは、凡ての人の死ぬ世界で、死ななかつたと云ふ時には、それは此法則の例外として扱はれるわけである。世の中で普通用ゐられる理屈は、如何程、それが、複雑に見えても、詮じつめて見れば、叙上の法式のいづれかに歸せられる筈のものである。パウロは演繹的論法を屢々使つてゐる。所が、彼は此普通の論理の外に、今一つの理屈を有つてゐた。

即ちそれは、『こうあつて欲しい』と云ふ慾望から出た所の理屈である。それは、自由の意志に根ざす所の一つの論理である。自然的法則は、『必ず死ぬ』と指示する時に我々が、『だけれども、自分は死にたくない』と欲することは少しも差支なのないことである。即ち、欲求論理とは、自然法則の以外に、自由意志の法則の働くことを確信するところから、組立てらるゝ一つの論法である。例へるならば恰度ポールが、重力の法則の束縛をある瞬間に脱して上へ飛ばされるやうに、死に抗して、甦りたいと云ふ要求があると、それは『自分は甦る』と云ふ確信へと移行して行つ



てやがて其處に、欲求から發生する一つの理屈が出来るのである。

靈魂不滅と云ふ信仰も、生きたいと云ふ要求から湧いた一つの論理である。かくて、要求に因つて、其事柄は、現實化されて來るのである。即ち、普通の演繹歸納の論理の外に、我々は、今一つの論理のあることを見出すのである。私はそれを欲求論理と指稱する。それは即ち、欲求から發生する眞理——眞實なブラグマチック・ツルースである。

パウロの思想、信仰には、此部分——要求から來た理屈が多い。パウロに於て著しいのは、必然的束縛——自然法からでなく、自由意志の要求から發生した信仰が夥しいことである。一例を挙げれば、『神』の信仰は、必然的束縛を受けた論理學からは發生しない、唯、自由意志を根柢としての發生する所の信仰である。そして、自由意思の可能性からして甦の信仰が出發する。それは唯、大きな要求と可能性を信ずる者の心のみ湧く所の一つの眞理である。それは、救の經驗でも同じことで

ある。人間の決定の外に、今一つの決定——神に由る可能を信ずることからそれは始まる處のものである。

超論理	の世界
-----	-----

パウロには、敍上の論理にも合はない超論理の部分がある。それは生命に關する、神の直觀の問題である。彼が、第三の天へ行つたと云ふが如き方面は、全く論理を絶した直觀の世界の消息である。

我々が若し、普通の論理の世界の經驗しか辿つた經驗がない場合には、全く推測もつかぬ、新らしい範疇である。更に、パウロの生活に特に多い默示と、祈禱の部分の如き、……それは、普通の理屈ではどうしても推測のつかぬ經驗の一範疇である。私は之をパウロに於ける超論理の部分と呼びたい。そして、此部分——宗教的直觀の分野は、理屈では分らないし、又表明出來ない。それで、常に譬喩の形で、表現される。信仰の消息の多くの部分が、主として、譬喩で以て説かれてゐるのは、此理由に因るのである。(イエスに於ても、此事は明白に見ることが出来る。)



信仰の世界は、哲學と云つた形式論理では、何と工夫しても、説き了ふせないものがある。全くそれは、一つの斷定として突然に呈出せられる。それで、その獨斷を生んだ心境を少しでも窺はざる者にとつては、全然、理解の餘地のないものに見えても止むを得ないのである。

パウロの思想の内容を検討するに當つて、之を、その哲學の部分(論理)、教條神學の部分(非論理)、信仰の部分(超論理)に三分して研究の歩を進めるならば、複雑な彼の思想の廣域を割合に容易に觀測することが出來やうと思ふ。

## 第二節 パウロの哲學的素養

文化都  
市タ  
ルソ

パウロの人物と思想を知るに當つて先づ第一に、彼が如何なる哲學の雰圍氣に居たかを見たい。或人は、パウロの哲學、そんな古臭いものを今時分研究して何になるかと輕蔑するかも知れぬが、實を云

へば、パウロ程の、大きな哲學を懷抱した人は、古代に於て絶無であると云つてもいい。有名なアバーデイン大學の人道講座の教授、ウキリアム・ラムゼー博士は、その『パウロの、及び其他の研究』Paulin and other studies の中に、『パウロは歴史哲學の學者としても、當時の學者のうち拔群である。若しパウロがイエスの弟子でないならば、哲學者としても、プラトン、アリストートルと比較し得る位の哲學系統を有つ者である』と述べてゐる。之は決して過言ではない。實際、此事は、我々が歐洲の思想の歴史を調べてみるならば何人にも合點の行く事實である。

それで、私は、今、パウロの同時代の哲學者を一應調べてみなくてはならぬ。パウロの出生したタルソと云ふ所は、文化的に非常に有名な町であつた。

パウロ曰ひけるは

「我はキリキヤのタルソに生れし、ユダヤ人にて、鄙しき邑の民に非ず、願はくば、民に語ることを我に許せ」(使徒行傳二十一章三十九)

それは確に彼が『鄙しき邑に非ず』と充分に自慢の出來るだけの、云はゞ、小ア



シアに於ける神戸長崎の如き町であつた。そして、文化の程度が極めて高く、優秀な哲學者を輩出した。アウグスト・カイザル（ルカ傳二章一）すら此町へ遊學に來たことがあつたと云ふ。だから、パウロの御自慢は決して嘘ではない。次に掲ぐるものは、パウロ前後の同市か出た哲人の一群である。

### パウロの故郷タルソの哲人

- 1 アサナドラス（ストイツク）
- 2 ネクタア（アカデミツク）
- 3 アンチベエテル
- 4 プルウチアデス
- 5 デイオゲエネス
- 6 アルテミドラス
- 7 デオドラス
- 8 デイオニシデス

パウロはかゝる所に生れ、かゝる所で其教養を受けた。哲學者としても、優秀な

素質を有つた人物であつた。だから彼がギリシヤの哲學者達に向ふに廻して、堂々と挑戰的論陣を張つたとしても、それは不思議ではない。

パウロ、アテンスに在りて、彼等を待てる時、その市こぞりて偶像に事ふるを見て、甚く心を傷めたり。

之故に會堂に於て、ユダヤ人、及び神を敬ふ人人を論じ、又日々市場に於て其遇ふ所の者と論ず。時にエピクロス派、並びにストア派の哲學者數人、これと相語れり。或人云ひけるは「この嘲づる者、何を言はんとするか」また或人云ふ「彼は異なる神々を傳ふる者の如し」と。そはパウロ、彼等にイエス及び復活の事を宣べしが故なり。遂にパウロをアレオパゴスに連れ行きて言ふ。

「汝が語る所の此新らしき教を我等知らせらるることを得るや、汝、異なる事を我等の耳に入れしが故に我等その何事なるを知らんとすればなり」凡て此アテンス人、及び其地に留まれる人は唯、新らしき事を告げ或は聴くことにのみ其日を送れり。

パウロ、アレオパゴスの中に立ちて云ふ。以下参照（使徒行傳十七章十六—二十二）

ギリシヤの聖人と云へば第一にソクラテスが挙げられる。プラトオ、アリストートルは其弟子である。プラトオの哲學思想と云ふものは、餘程、基督教思想に似通ふた點が多い。彼は、愛と靈魂不滅の哲學者である。彼は靈魂の潔めを説き、義人に



就いてやかましく云ふ。日本では木村鷹太郎氏がプラトオ全集を譯してゐるが、プラトオのものは、すべてが、劇的に書かれてゐる。殊にその對話篇は面白い。ラスキンは世界的に有名な本として、聖書と、プラトオとダンテの神曲を挙げ、人間は此三冊を讀めばそれでいゝと云つてゐる。ラスキンがか程迄に推賞するだけあつてプラトオの著述はいづれも、盡きざる思想の泉と云つてもいゝ、趣味のある美しいものである。プラトオは殆んど一神教である。

今日の基督教會のカルヴァイン神學及び、中世紀のスコラ哲學にせよ、トマス・アクキナスの哲學にせよ、いづれも皆、ソクラテス、プラトオ、アリストートルの哲學系統を受け継いだものと云つても大差がない。初代教會では主としてプラトオ思想を繼承し、中世期から近世期へかけては、皆(カルヴァインにしても)アリストートルの方法を採つたものである。

今日の基督教會迄が感化せられる程の、強い、優れた哲學思想が旋回してゐた。

がパウロ時代のアテンスであつた。彼はかゝる雰圍氣の中へ乗り込んで行つたのであつた。

哲學系  
統の地理  
的移行

哲學系統の流と云ふのは妙なもので、人間と地理との二つの影響を受けて轉移する。ギリシヤ哲學の流系と云ふものは、一つの流れは地中海のクレテ島を踏臺にして、エヂプトから到來したものである。そして、それが一つは小アジアに流れ、今一つはアテンスの方面へ流れ行つたものゝやうである。元來、ギリシヤ文明の最初のもものは小アジアから移入されたものである。かの近世思想にも多大の影響を與へてゐる有名な、『萬物流轉』の哲學者ヘラクリタスはエペソ——小アジアの西南端——の出身である。かのロゴス哲學の如き——其思想の流域を尋ねると、最初は、南(エジプト)から出發して北に移り、それから西へ西へと移動して行つて居る。ヨハネ傳に引照されてゐるロゴス哲學(ヨハネ傳一章一十七)、即ち『神』と『道』(意味)とを同一視する考も、——アレキサン



ドリテ學派が著しく提唱したものであるとは云へ——實は「南方」に古來から流れてゐた一つの思想であつたのだ。一般的に云へば、南方思想、エヂプト系統の思想と云ふものは、いつでも神秘的、直觀的で、従つてドグマツク（教義的）であることを其特長としてゐる。プラトオの哲學は多分に南國的色彩を帯びてゐる。（拙著「精神運動と社會運動」第九章参照）

ギリシヤ思想への、もう一つの寄與はヘルシヤ方面から出發して西漸して來た東方思想であつて、それは天文學の研究等を其立脚點とする云はゞ科學的思想である。民族的に見れば即ち、アリアン系の流系に屬するもので、かの、アリストートルの如き脈を引ひてゐる思想系統である。そしてそれは其後ヅウツと羅馬へ移入して行つた。そして、此二つの著しく色彩を異にする思想の分派に因つて、ギリシヤには、二つの文明の形相が——一つはプラトオ的な、今一つはアリストートル的なものが——生み出されたのである。それが、羅馬文明時代には交錯して、思想界

を紛糾して種々の渦紋をつくつたものである。

苦悶せるアステ

パウロがアテンスを訪ねた時代のギリシヤは正に其デカダンス——爛熟期であつた。其思想界の雰圍氣こそ極まりなく擾亂せるものであつた。

當時の、ギリシヤ、羅馬世界の思想系統を大別すれば次の如きものであつたかと思はれる。(1)小アジア地方に發生した神秘主義、(2)ユダヤ宗教の影響、(3)アリアン文明の感化、(4)エヂプト傳來の宗教思想、之に加へて(5)北方から種々の迷信が持ち込まれ來たのであつた。

(註) (1)當時の小アジア地方には、到る處に文化の小中心を形づくる小都市が散在してゐた。パウロの生ひ立つたタルソを始め、ラオデキア、コロサイ、エペソ、かのホームアの詩で名高いトロイ（使徒行傳十六章八——トロアスの附近）がそれであるが、其地方で、一種の神秘主義の色彩の濃い宗教思想が生じた。  
(2)東方からは、アストロノミイ（天文學）が早く進んでゐたが、それから出たアストロロジイ（星占學）が、



西漸して来た。

(3) イシスの宗教、及びオルフキズムの如き埃及神學思想に撫育された思想は、南方からギリシャ羅馬へ滲入した。

此等の紛糾した思想が一箇所に落合つて恐ろしい旋渦を描いた都市があつたとすれば、それは、パウロの當時のアテンスでなければならなかつた。ギリシャは、長年月の戦争の結果、今や衰微の極に達してゐた。其處には、何かしら、此儘デットしてゐてはならない、救はれなくてはならないと云ふ考が、醸されてゐた。パウロは此都市を目指して勇敢なる、イエスの宗教の一宣傳者として乗り込んで行つたのである。

此町は哲人ソクラテスが其思想運動に失敗の憂目を嘗めた處であつた。パウロは、此町の巷々に偶像の充ちてゐるのを見て『其心に憤慨を懷いた』と云ふ。獨逸人は議論好であると云ふが、ギリシャ人も矢張、議論を交はすことを甚しく喜んだものである。

である。『凡て此アテンス人、及び其地に留まれる人は、唯新らしき事を告げ、或は聴く事のみ其日を送れり』と云ふのが、云はゞギリシャ人の氣風であつた。パウロは、かゝる都市の市場で、エビクロス派、及びストイク派の人々と論争を重ねたのであつた。

ストイク風の思想生活は、非常な感化力を以て、丁度、日本の國の報徳教のやうな調子に、當時のギリシャ羅馬へ流布宣播されたものである。

ゼノ Zeno は斯學派の鼻祖として傑出した哲人であつた。彼は、一寸禪宗的の——知的に救はれると云ふ思想を懷いてゐた。神は靈で、一つで、遍在で、萬人は皆一つの血から出た——と云ふ考の如きも既にゼノの抱いた所のものであつた。ゼノは随分長命して百歳近く迄生きたが、切腹して死んだ。

デイーン・フワラーの著に『神の探求者』“Seeker of God”と云ふ名著があるが、其第一に挙げられてゐる哲人は、ストイク派のセネカ Seneca である。彼はネロ皇帝



の先生であつたが、貧乏に満足して、……油徳利と油皿と、書物五六冊あれば何にも要らぬと云ふ清貧生活を樂んだ哲人であつた。彼は儒學や、王陽明の思想に酷似した知情合一の生活を説いた。セネカは同代の哲學者の模範であつた。

エピクロス派は——ストイクが克己を説くに反して——快樂説を主唱した。人間の生きてゐる本然の理由は快樂である。然し、人間の本性に於ける快樂と云ふものは豚の快樂とは違ふ。それは物質主義的であつて、然も精神主義的である。斯う云ふ本然的な快樂を求めなくてはならない——と云ふのが此學派の所説の一般であつた。シエンキウイツチは『クオヴデイス』(何處に行く)の中に、享樂主義的な羅馬の貴族の思想生活を巧みに描寫してゐるが、其中にプラトニアスが、體溫と同溫度の風呂の中へ浸つて、自分手に動脈を斷ち切つて快樂を貪り乍ら死んだ事が記されてゐる。

パウロが、置かれたギリシヤ羅馬の世界の空氣と云ふものは大體かくの如きもの

であつた。

彼は、斯う云ふ中へはいつて行つて、何をしたか——彼は、當時の哲人に劣らぬ哲學系統を把持しゐたと云ふが、彼は何をアテンスの智識階級の前で陳べたのであつたか。

アレオ山アレオバゴスでの彼の演説は、卓絶した彼の見識を我々の前に展開するソクラテスの哲學と比べてみても決して劣らね程のものである。

### パウロのアレオ山の演説

アテンスの人よ、われ汝等が事毎に鬼神を敬ふの甚しきを観る、われ途を行く時汝等が敬ふところの者を見しに「識らざる神」にと彫り付けし一つの祭壇を見出せり。故に汝等が識らずして敬ふ此者をわれ汝等に示さん。それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は、これ天地の主なれば手にて造れる宮に住み給はず、かつ凡ての人に生命と氣息と萬物を與へ給へば、物に乏しきことなし。人の手にて事へらるゝものに非ず、また此神は凡ての民を一つの血よりつくり、悉く地の全面に住まはせ、豫じめ其時と住むところの界とを定め給へり。此は人をして神を求めしめ、彼等が或は揣りうる事あらん爲なり。然れども神は我等各人を離るゝ事遠からざるなり。それ我等は彼に頼りて生き、また動き、また在ることを得るなり。



汝等の詩人達も、「我等は其裔なり」と云ひしが如し。かく我等は神の裔なれば其神を金銀又は石など、人の工と思考とを以て造れる者と均しく思ふべからず、往者に暗かりし時は神之を見過しに爲給ひしが今は、何處の人にも皆悔改むる事を命じ給ふなり。そは神、既に其立てし所の人により義をもて世を裁くべき日を定め、此事に就いては、彼を死より甦へらせて其證を萬人に與へ給へり。(使徒行傳十七章二十二—三十一)

『神は凡ての民を一つの血よりつくつた』と云ふのは、ストイクを想起させる考であるが、パウロの方が、それよりもはつきりしてゐる。また『神が……凡ての人を悉く地の全面に住はせ、豫じめ其住所と境界を定めた』——と云ふのは、彼の歴史哲學を示すものである。或は、それは歴史神學と呼んでもいい部分である。彼は『我等は、神のうちに生き、動き、また在るのだ』と云つたが、之は、汎神論に代ゆるに唯一神教的思想を置き換えたものである。パウロは、かく高等な教養のある圈内にはいつても充分にそれに挑戦し、抗爭し得るだけの思想系統を懷抱してゐた。だから、彼は前述せる如き思想の動亂の渦中に處しても、少しも悪怯るゝ所なく勇敢

に突撃し得たのであつた。日本の思想界を、或人は、信仰のみで制服しやうと考へるが、それは徒勞に了る事を知らなくてはならぬ。熱烈な信仰を裏付ける大きな、時代のどの思想の流系にも、後れをとらぬだけのものを、持つ事に努めるのでなくてはならぬ。

### 第三節 彼の思想の系統

五	種
見	の
解	解

パウロの思想の系統に就いては、色々の解釋が行はれてゐる。パウロの時代が時代であり、又彼の教養が廣汎なものであり、その經歷が曲折の多いものであるだけに、一寸簡單に、これを類別することは六ヶ敷い。けれども、大體から云へば、彼の思想の系統については、次の如き見解が下されやうと思ふ。

### 五種の解釋